

静岡大学教育学部 角替弘志・馬居政幸 編著

# 地域における生涯学習の課題

——浜岡町教育課題調査より——

地域における生涯学習の課題

浜岡町教育課題調査より

角替 弘志  
馬居 政幸 編著

## はじめに

生涯学習社会、それは教育を学校に任せきるのではなく、地域・家庭・学校が一体となって子供の教育に取り組むとともに、大人自身が自らの生き方、生活をじっくりと見つめ直そうとする社会であるということができよう。私たちの社会は豊かになった。しかし、豊かになった社会は、また、新たな教育の仕組みを必要としている。衣食足りたからといって、自然に礼節が備わるものではなかったし、高学歴社会になったからといって、家庭や地域社会での教育が不要になったわけでもなかった。

しかし、新たな教育の仕組みを整えるということは簡単なことではない。家庭や地域の教育力が弱まっているからといって、それを高めようというスローガンを掲げるだけでは問題は解決しないし、学校、公民館、図書館等の教育施設をつくるだけでも問題は解決しない。組織をつくるということより、どこに問題点があるかを的確に把握することが、まず必要であり、それを踏まえて、とるべき方策が検討されなければならない。

本書は、1986年から1988年にわたって、静岡生涯教育研究会（代表、角替弘志）が静岡県浜岡町において行った教育課題調査の結果に、生涯学習の課題を明確にするという視点から、さらに検討を加えたものである。調査を通し、どの地域においても共通する問題点が見出され、それについての認識を深めることが必要であると考えたからである。1988年には、この調査に基づいて「浜岡町の教育課題」（静岡生涯教育研究会編、浜岡町教育委員会発行）を編集し、住民の方々が生涯学習

をすすめるための資料としていただいたが、この問題に対する理解を深めるために、さらに、本書を役立てていただくことができれば幸いである。

調査を行った時点からかなりの年月が経過した。その間には浜岡町生涯学習推進大綱も策定され、生涯学習への具体的な取り組みが始められている。ただ調査の時点における生活や学習の実態、課題が大きく変化したということはない。むしろ、生涯学習の取り組みはこれからが本番であるといっても過言ではない。そのことからすればこの調査結果を新たに見直すことに意味があると考えているしだいである。

教育課題調査では、浜岡町及び浜岡町教育委員会に全面的なご支援とご協力をいただいた。あらためて感謝するとともに、調査結果の新たな視点での見直し、再検討に長い時間がかかってしまったことをお詫びするしだいである。出版にあたって根気よくみまもっていただいた静岡県出版文化会にも厚くお礼を申し上げなければならない。

また、この教育課題調査を踏まえて、生涯学習の在り方や内容をさまざまな面から検討する意図を持って、静岡生涯教育研究会のメンバーで昭和63年に10か月にわたって静岡新聞の教育欄に「学びへの挑戦」を連載した。本書の巻末に附論としてその全部を掲載した。転載を快諾して下さった静岡新聞社に感謝する次第である。

平成4年12月

編著者

#### ●各章の執筆者●

- 序章 角替弘志（静岡大学教育学部教授）
- 第1章 山本章（静岡大学教育学部教授）
- 第2章 落合良行（調査当時、静岡大学教育学部助教授  
現在、筑波大学心理学系助教授）
- 第3章 外山知徳（静岡大学教育学部教授）
- 第4章 馬居政幸（静岡大学教育学部助教授）
- 第5章 瀬戸知也（常葉学園大学教育学部助教授）
- 第6章 外山知徳（静岡大学教育学部教授）
- 第7章 角替弘志（静岡大学教育学部教授）
- 終章 馬居政幸（静岡大学教育学部教授）

なお、データのコンピュータによる分析は望月雄蔵（静岡大学教育学部教授）が行い、調査の整理には主に宮島明利（調査当時、静岡大学大学院生、現在、御前崎町立御前崎小学校教諭）が当たった。また、第1章、第2章については、角替が全体的な調整を行った。

# 目 次

はじめに	1
序章 地域社会の変化と教育の課題	9
1. 生涯学習社会に向かって	9
(1) 変化する生活	9
(2) 生活の変化を生み出しているもの	11
(3) 「豊かな社会」の教育課題	14
(4) まちづくりと生涯学習	15
2. 浜岡町と生涯学習	16
(1) 浜岡町の特徴とまちづくりの方向	16
(2) 町民憲章と生涯学習	19
(3) 生涯学習の展開	21
第一章 小学生・中学生の生活	23
1. 家庭の状況	23
2. 子どもの生活時間・生活行動	26
3. 学校外での子どもの活動	46
4. 子どもと父親・母親	50
5. 子どもの考えていること	56
6. 生活習慣の定着度	62
7. 子どもの行動様式・価値観	65

8. 親からみたわが子 68

9. まとめ 89

## 第二章 高校生の生活 93

1. 家庭の状況	93
2. 高校生の生活時間と行動	94
3. 高校生の心理	98
4. 進路の決定をめぐる	101
5. 浜岡での生活について	105
6. まとめ	110

## 第三章 幼児をめぐる教育環境 115

1. 幼児の教育環境調査	115
2. 調査結果	116
3. 幼児の家庭環境	117
4. 幼児の日常生活	128
5. 幼児の生育歴	138
6. 幼児の健康	142
7. 育児	147
8. まとめ	152

## 第四章 大人の学習とその実態 157

1. 成人の学習行動・学習意識調査	157
2. 浜岡町の大人の学習行動の特性	158

3. 8グループの比較からみた教育課題	167
4. 多様で異質な学習機会を	183
<b>第五章 子どもの問題行動をめぐる親子の関係</b>	185
1. 子どもの問題行動に関する意識調査	185
2. 生徒の側の「問題」認識と父母による「問題」認識	187
3. 生徒の「問題」行動経験と父母による認識について	191
4. 子と親の問題行動認識のズレ	198
<b>第六章 住まい方に見る教育課題</b>	211
1. 住まい方調査	211
2. 浜岡町の住生活	214
3. 住生活に関する課題	220
<b>第七章 浜岡町の教育課題</b>	223
——浜岡町の教育課題とそれに向けての提案——	
<b>終章 地域における生涯学習の展望</b>	235
1. なぜ「生涯学習」なのか	236
2. 学習者のニーズを中心とした施策を	237
3. 学校教育との連携を	239
4. 地域づくりのために	241
5. 学習情報ネットワーク	243

附表 浜岡町教育課題調査の概要	246
<b>附論 「学びへの挑戦」(静岡新聞連載)</b>	249

## 大人の学習とその実態

### 1. 成人の学習行動・学習意識調査

人口増加に代表されるように、浜岡町はかなりの速度で都市化しつつあるといえよう。そのため、町の教育課題は、まず、変化する町の人達の実態を明らかにすることから始める必要がある。

このような意図から、浜岡町の大人を対象に学習行動・意識調査を実施した。そしてその結果をコンピューターで分析したところ、浜岡町の人達は、かなり異なる特徴をもった8種類のグループに分けられることがわかった。そこで、性別や年齢や職業などの違いをもとにして、それぞれのグループのイメージを特徴的な、ネーミングとイラストで描いてみた。それが図4-1である。

ここでは、この8種類の人達の学習意識や学習行動の特色を明らかにすることにより、浜岡町の教育課題を考えてみたい。

そのために、まず、次の三つの調査結果を用いて、浜岡町の大人の学習行動や学習意識が、静岡県全体の傾向と比較してどのような特徴があるかを明らかにしたい。

①浜岡町成人調査

②成人調査と同時に実施した浜岡町有識者調査

③浜岡調査の前年に実施した静岡県民調査

その次に、8種類の人達の学習行動や学習意識を互いに比較することにより、浜岡町において生涯学習を進めていくために検討しなければならない課題を提示していきたい。

## 2. 浜岡町の大人の学習行動の特性

すでに述べたように、浜岡町は遠州灘に面し御前崎の西側にある人口約2万の町である。昭和30年代には、全国の農漁村と同様に過疎化の中にあった。それが、昭和40年代の半ばに、中部電力が電子力発電所を建設したことを契機に急激に都市化していった。その結果、現在は、基本的には旧来の農業を基盤とする生活様式や地域組織が保持されているが、新住民や若者を担い手とする都市的文化もまたかなりの速度で浸透しているという、新旧が混在する町になっている。

町の人達が8種のグループにわかれたのは、このような町の状況を反映したものであろう。

他方、浜岡町は、原子力発電所誘致に伴う豊かな財源をもとに公民館や児童館、あるいは体育館や運動場等を建設・整備してきた。そのため、社会教育施設は静岡県内でトップクラスである。年間の全体予算規模も市レベルの大きさである。

このような浜岡町の特徴から、浜岡町での調査結果は浜岡町のみにあてはまるものであって、一般化できない、という指摘があるかもしれない。実際に、「浜岡は特別ですから」と語る静岡県内の他市町村の社会教育担当者に出会う機会は多い。

そこで、調査結果が浜岡町独自のものかどうかを調べるために、浜岡町の大人をコンピューターで8グループにわけするために用いた31種の学習行動の調査結果を、静岡県全体の平均値と比較してみたい。

表4-1は、31種の各学習行動に「参加した」と回答した人達の比率を、浜岡町の「成人」、浜岡町の「有識者」、静岡県の「県民」の順に並べたものである。また、互いに比較しやすいように、5%以上の差を基準にして、参加率が高い方から、「○」、「△」、「×」の印をつけた。さらに、「有識者」と「成人」あるいは「県民」との差を備考に記入しておいた。

まず、○印に注目したい。

「有識者」には31項目中30項目に○がついている。唯一△印である「先生習いごと」も、○との差は最低の5%である。このことから、全体として、「有識者」の学習行動への参加率は圧倒的に高いといえる。

「成人」と「県民」の差に注目すると、△が「成人」と「県民」双方についている項目は10個あり、双方とも○は6個である。従って、両者の差がほとんどない学習行動は、全体の過半数に当たる16項目になる。

また、「成人」のみ△の学習行動と「県民」のみ△の学習行動をあげ、その中で両者の差が10%以上のものに◎をつけたのが表4-2である。この表によると、『「成人」のみ△項目』は、いずれも地域を舞台に集団で行われる傾向が強い活動や学習である。それに対し、『「県民」のみ△項目』は、特定の施設や明確な目的をもって個人で行う傾向が強い学習である。

この点については、浜岡町の学習環境による機会の差が影響してい

図4-1

学習行動による住民類型の特性ならびにネーミングとイメージイラスト

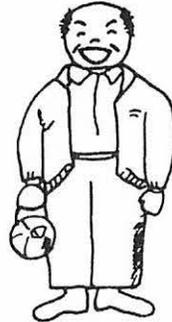
類型A「がんばるお母さんグループ」



30代後半の子育て中の地元の女性が多く、つきあい程度の地域活動以外は学習していない。

19.8%

類型B「活躍する役職おじさんグループ」



地域活動に熱心な地元の中高年の男女。いわば地域有力者。特に男性はほぼ全員役付き。農家に従事し講習会や旅行にはよく積極的に参加するが勉強は苦手。

7.5%

類型C「頼れるお父さんグループ」



地元の30代後半男性。地域活動には進んで参加し役職も持っている。特にスポーツは欠かさない。学歴も低くないが、美術などを鑑賞すること以外には特別な勉強はしていない。いわば、浜岡のこれからの担い手。

6.2%

類型D「新住の若い専門家グループ」



浜岡に新たに住むようになった若い男性が典型。学歴が高く、事務や専門職が多い。学習意欲は高く、テレビや通信教育で学びスポーツや資格を取ることに高い関心が高いが、地域活動へは参加しない。

11.1%

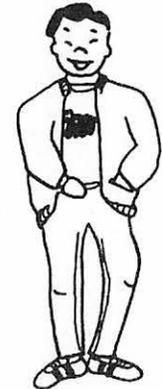
類型E「るんるんギャル・ママグループ」



浜岡に新たに住むようになった主婦を含めた若い女性が典型。地域に関しては拒否に近く本調査が前提とする学習活動には参加せず。

13.1%

類型F「土地っ子若い衆グループ」



地元の若い男子が中心。そのためか地域活動を拒否しないが、特にやるわけでもない。高卒で工員や専門職が多く、資格を取ることは熱心。だが、他の勉強には関心なし。

17.5%

類型G「活躍する中年婦人グループ」



地元の中年以上の主婦が中心。自営や農地を持っている人が多い。文化祭に出品し、自ら参加するなど、浜岡で行われる学習活動に最も熱心に関わる人達。

17.5%

類型H「インテリシルバークグループ」



地元の学歴の高い高齢の男女。農業に加え会社経営や専門・自由業が多い。全般的に学ぶことに積極的で、特に個人で学習することが多い。いわば、現在の浜岡のリーダー。

7.3%

表4-1

## 学習行動における「浜岡成人」「浜岡有識者」「静岡県民」相互の比較

	浜岡町		静岡県 ③県民	三者の差	
	①成人	②有識者		②-①	②-③
1.学級・講座参加	△31	○45	×17	14	18
2.先生について習いごとした	○23	△18	○24	-5	-6
3.図書館に行った	×23	○49	△30	26	19
4.テレビ・ラジオで勉強	△15	○24	△15	9	9
5.通信教育で勉強	7	8	6	1	2
6.カルチャーセンター	3	7	4	4	3
7.免許・資格を学校で勉強	21	17	19	-4	-2
8.免許・資格を個人で勉強	21	21	22	0	-1
9.所属団体の研修会・講習会	△56	○89	×50	※33	※39
10.研修・視察のため旅行	△40	○86	△38	※46	※48
11.講演会に行った	△52	○89	△53	※37	※36
12.音楽会・演劇に行った	△46	○60	△44	14	16
13.展覧会に行った	×46	○68	△53	24	15
14.スポーツ・観戦でかけた	△51	○69	△53	17	16
15.美術館・博物館に行った	×36	○66	△48	※30	18
16.文化祭などに出場	△15	○21	△15	6	6
17.文化祭などに出品	×8	○14	○14	6	0
18.新聞や雑誌などに発表	△3	○12	△3	9	9
19.スポーツ大会に出場	△48	○67	△44	19	23
20.ボランティア活動	△33	○58	×22	25	※36
21.趣味のグループで勉強	27	28	29	1	-1
22.スポーツ・グループ運動	△34	○46	△32	12	14
23.健康・一人で運動	×26	○36	○33	10	3
24.趣味・一人で勉強	×34	○53	△44	19	9
25.公民館、町民館に行った	△81	○93	×73	12	20
26.町や地区の祭りに行った	△79	○86	×73	7	13
27.地域の体育・文化祭に行った	△69	○84	×61	15	23
28.地域清掃・消防に参加	△63	○85	△65	22	20
29.青少年活動に参加	△38	○70	×28	※32	※42
30.地域の団体・会合に出た	△44	○68	×38	24	※30
31.地区や班・町内会に出た	△63	○85	×53	22	※32

るともいえよう。浜岡町には、公民館や町民会館等の地域施設は整備されているものの、美術館、博物館、図書館は、いずれもないからである。さらに、このような傾向は、◎がついた6項目をみるとより顕著である。

ただし、「成人」と「県民」の差は、最も大きい項目でも14%である。それに対して、同じ浜岡町民でありながら、「成人」と「有識者」の差は、「10. 研修会・講習会」の46%を最高に、「成人」と「県民」の差よりもかなり大きい項目が多いといえる。

これらの点から、浜岡町の大人は、静岡県民全体と比較して、地域と関わりが強い学習行動（一般に集団で行う学習が多い）に参加する度合いが高いが、逆に個人で行う学習への参加率は低い。但し、両者の差よりも、浜岡町内部の「成人」と「有識者」との差の方が顕著であることが、より特徴的といえる。また、「有識者」の場合、他の二者に比較して特に参加率を示す項目は、地域での人間関係や組織と関係する活動や学習が多いことも指摘できる。（表4-1の※印を参照）

ところで、一般に地域に関わる活動や学習への参加度は、農村部から都市部に移るに従い低下するといわれる。県民調査でも、そのことは確認されている。

浜岡町の場合、先に述べたように、その地理的条件から、通常は基本的に農村部として位置づけられる。確かに「有識者」は、「成人」や「県民」との比較からみて、農村部の性格を色濃くもつことが確認できる。「成人」も「県民」との比較では地域との関わりは強い。しかし他方で、「成人」の場合は、「県民」との差よりも町内の「有識者」との差の方がかなり大きい。その意味で、むしろ「県民」の平均に近い、といった方がより正確かもしれない。とすれば、浜岡町にも都市化の波が確実に押し寄せていることもまた容易に想像できる。

この傾向を意識の両側から確認するために用意したのが表4-3である。

表4-2

## 「浜岡成人」「静岡県民」の学習行動の比較

『「成人」のみ△項目』	『「県民」のみ△項目』
◎1. 学級・講座参加 (14)	3. 図書館 (7)
9. 研修会・講習会 (6)	13. 展覧会 (7)
◎20. ボランティア活動 (11)	◎15. 美術館・博物館 (12)
25. 公民館・町民会館 (8)	17. 文化祭などに出品 (6)
26. 町・地区・祭り (6)	23. 健康・一人で運動 (7)
27. 地域体育・文化祭 (8)	◎24. 趣味・一人で勉強 (10)
◎29. 青少年活動参加 (10)	( )内は両者の差、数値は%小
30. 地域の団体・会合 (6)	数点は四捨五入
◎31. 地区や班・町内会 (10)	

表4-3

## 「浜岡成人」「浜岡有識者」「静岡県民」の地域に対する意識の比較

①「そう思う」	浜岡成人		浜岡有識者		静岡県民	
	①%	②%	①%	②%	①%	②%
②「どちらかといえばそう思う」	①%	②%	①%	②%	①%	②%
地域の会合には必ず出席すべき	66	23	75	20	66	24
地域よりも個人的事情を優先すべき	12	22	2	22	9	20

この表に示すように、「地域の会合には必ず出席すべき」という質問に、「そう思う」と強く肯定した「有識者」が75%であるのに対し、「成人」「県民」はともに66%である。逆に、「地域よりも個人的事情を優先」には、「そう思う」と答えた者の比率は、「成人」が12%、「県民」が9%であるのに対し、「有識者」は僅か2%で最も低い。

この結果をみる限り、「成人」の場合、意識の面での地域離れの速度は行動よりも早いようだ。浜岡町の都市化はかなり進んでいるといえる。

しかし他方で、「有識者」という現在の浜岡町をリードする人達にとっては、意識のレベルにおいても、地域は非常に重要なファクターとして捉えられていることもまた確認できる。

ここでいうところの「成人」とは、浜岡町の20才以上の大人の中から無作為で抽出した1,000名に対する調査結果の平均値である。その意味で町全体の平均的な大人の行動と意識を現していると考ええる。

どうも、町のリーダーと一般の町民の間には、かなりの断層があることは間違いないようである。加えて、浜岡町全体の傾向が静岡県全体の平均に近いことから、この断層は明らかに一般町民の意識と行動の方向に向かって高くなっているといえる。

そして、実は、このような一般の住民とリーダー達のズレこそ、静岡県内において、あるいは全国の各市町村でも、従来の地域組織や地域活動を基盤にして生涯教育を推進している方々が、最も苦慮している問題の一つではないだろうか。

それは、生涯教育(学習)を“地域づくり”と重ねて行う場合の課題である。すなわち、生まれ育った土地のつながり(地縁)を最も重視する人達を中心にしながらも、新たに移り住んできた様々な人達を巻き込みつつ、異質な人達が共に生活する場としての“地域社会”を再構築することを目的として生涯教育(学習)を進める時に生じてくる課題である。

逆に、このような課題は、大都市で生活する人達の生涯学習の問題にはなりにくいであろう。なぜなら、大都市では、個人主義的文化をもとにした人間関係が一般的であり、生涯学習は一人一人のニーズに基づいて、多種多様な教育機会を選択することが課題だからである。

したがって、大都市ではなく、全国各地の地域社会において生活する人達を対象に生涯教育を推進するための課題として問題を捉えるならば、有識者と成人一般との断層、さらにはその成人が8種にわかれるという浜岡町の現状が提示する問題は、決して浜岡町独自のもので

はないと考える。むしろ、浜岡町成人の傾向が静岡県の平均に近いことを考慮すれば、8グループ相互の関係の中に、今日の全国各地の地域における課題が典型的かつ集中的に込められていると考えたい。

そこで、次にあらためて学習行動に基づく8種のグループの特性について考察したい。なお、その前に、ここでいうところ“地域”あるいは“生涯教育（学習）”の意味を整理しておきたい。

- ①大都市や地方中心都市ではなく、都市化の影響は避けえないものの、今日でも伝統的な地域組織が一定の機能を果たしている中規模の市町村における生涯教育（学習）
- ②行政区域をベースとしながらも、日常的な人間関係・コミュニケーションを恒常的に保つことが可能な範囲、という意味での「地域社会」の住民が主体となる生涯教育（学習）
- ③国や県や民間ではなく、市町村教育委員会・行政がバックアップする生涯教育（学習）

また、ここでは「教育」を、「学習」の制度的な保障という意味でとらえておきたい。そのため、「生涯教育」という言葉は、主として、教育委員会・行政や地域組織のあり方、あるいは行政施策上の問題に関わることを意味する言葉として使用したい。また、「生涯学習」は、学習主体である地域の人達一人ひとりのあり方の問題に関わることを意味する言葉として使用したい。そして、この両者の問題や課題に関係することをについては、「生涯教育（学習）」と記すことにしたい。

### 3. 8グループの比較からみた教育課題

#### (1) 各グループの学習行動参加率の比較

浜岡町の成人調査では、これまでの述べてきた31種の学習行動に加え、58種の学習意識の調査を行った。この学習行動と学習意識の調査結果を用いて、8グループの相互の関係の特性を把握するために用意したのが表4-4である。

表の左側の欄には、31種の学習行動項目を、それぞれ参加率の最も高いグループには「◎」印を付けて、また、著しく低いグループには「×」印をつけて記入した。右側の欄には、58種の学習意識項目それぞれについて、その肯定度（「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」）が最も高いグループに「◎」印を付けて、また、低いグループに「×」印を付けて記入したものである。なお、グループ間の差が4%以内の項目は両方に記入した。またそれ以上の差があっても、グループの特色をみるために必要な項目は、差の大きさにより「○」印と「△」印をつけそのグループに記入した。

まず、各グループに記入されている31種の学習行動の種類と数を調べ、それらを、グループに属する人達の浜岡町民全体に占める割合と比較してみると、次のようなことが明らかになった。

参加率の高い学習項目が18と最も多いのは、「インテリシルバーグループ」である。しかし、このグループに所属する人達は、浜岡町全体の7.3%にすぎない。

二番目は、11項目の「頼れるお父さんグループ」であるが、やはり浜岡町全体の6.2%で、最も小さいグループである。

三番目は、6項目の「活躍する役職おじさんグループ」と「活躍する中年婦人グループ」である。町民全体に占める割合では、「活躍する役職おじさんグループ」が7.5%でやはり小さいが、「活躍する中年婦

人グループ」は17.5%と大きくなる。

そして五番目が、3項目の「がんばる母さんグループ」と「新住の若い専門家グループ」と「土地っこ若い衆グループ」である。「がんばる母さんグループ」は町民比率が最も高く19.0%ある。「新住の若い専門家グループ」も11.8%で小さい方ではない。「土地っこ若い衆グループ」も11.8%で小さい方ではない。「土地っこ若い衆グループ」も11.8%で小さい方ではない。

表4-4(1)

各類型相互の学習行動と学習意識の比較表

	学 習 行 動		学 習 意 識	
	参加率の高い項目	参加率の低い項目	肯定率の高い項目	肯定率の低い項目
「がんばるお母さんグループ」19.8%	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎25. 公民館、集会所、町民会館などに行った</li> <li>◎26. 祭りにいった</li> <li>◎28. 地域の清掃活動・防災活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×2. 先生習いごと(0)</li> <li>×5. 通信教育(0)</li> <li>×6. カルチャーセンター(0)</li> <li>×17. 文化祭・作品・出品(0)</li> <li>×18. 新聞、雑誌などに発表(0)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎18. 子供・クラブ活動熱心よいこと</li> <li>◎20. 子供・家庭で手伝いさせるべき</li> <li>◎29. したいことできる青年のみ</li> <li>◎36. 地域活動参加大切</li> <li>◎43. スポーツ良き仲間</li> <li>◎56. 浜岡町は体育・スポーツ施設十分</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×11. 自由な時間(余暇)増える</li> <li>×44. 趣味やスポーツ経費自己負担</li> </ul>
「活躍する役割おじさんグループ」7.5%	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1. 学級・講座参加</li> <li>○9. 所属団体の研修会・講習</li> <li>◎10. 研修・視察・旅行(男100%)</li> <li>◎20. ボランティア活動(女性71%)</li> <li>◎30. 地域の団体の会合に出た</li> <li>◎31. 地区や班・町内会の会合に出た</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×2. 先生習いごと(0)</li> <li>×6. カルチャーセンター(0)</li> <li>×7. 免許・資格・学校(0)</li> <li>×17. 文化祭・作品・出品(0)</li> <li>×18. 新聞、雑誌などに発表(0)</li> <li>×5. 通信教育(1人)</li> <li>×8. 免許・資格・個人(1人)</li> <li>×16. 文化祭等に出場(2人)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎2. 社会の変化・大変</li> <li>◎14. 仕事はほどほど・のんびり</li> <li>◎17. 子供は遊びより勉強</li> <li>◎30. 青年・多少行き過ぎ容認</li> <li>◎32. 祖父母・孫の面倒</li> <li>◎34. 老人は老人だけで</li> <li>◎38. 父・夫は家事無し当然</li> <li>◎46. 浜岡町・成人学習活動盛ん</li> <li>◎49. 町民は大学や短大で勉強する意欲ある</li> <li>◎57. 地域の公民館・集会所は地域の十分活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×4. 学校の勉強での知識・技術だけでは不十分</li> <li>×12. ゆとりは趣味や楽しみを持つことから</li> <li>×16. 近隣付き合い面倒</li> <li>×35. 地域の人達は助け合うべき</li> <li>×58. 地域よりも個人的事情を優先</li> </ul>

表4-4(2)

	学 習 行 動		学 習 意 識	
	参加率の高い項目	参加率の低い項目	肯定率の高い項目	肯定率の低い項目
「頼れるお父さんグループ」6.2%	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎9. 所属団体の研修会・講習</li> <li>◎13. 展覧会</li> <li>◎14. スポーツ・観戦</li> <li>◎15. 美術館・博物館</li> <li>◎19. スポーツ・出場(100%)</li> <li>◎22. スポーツ・サークル・運動</li> <li>◎25. 公民館、集会所、町民会館などに行った</li> <li>◎27. 地域体育祭、文化祭などに行った</li> <li>◎28. 地域の清掃活動・防災活動</li> <li>◎29. 青少年のための活動に参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×2. 先生習いごと(0)</li> <li>×6. カルチャーセンター(0)</li> <li>×18. 新聞、雑誌などに発表(0)</li> <li>×5. 通信教育(2人)</li> <li>×7. 免許・資格・学校(3人)</li> <li>×8. 免許・資格・個人(1人)</li> <li>×17. 文化祭・作品・出品(2人)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎1. 社会の変化・激しい(100%)</li> <li>◎4. 学校の勉強での知識・技術だけでは不十分</li> <li>◎9. 日常生活、知識・教養必要(100%)</li> <li>◎12. ゆとりは趣味や楽しみを持つことから</li> <li>◎24. 主婦・趣味やスポーツ、良いこと</li> <li>◎26. 団・サークルの青年好ましい</li> <li>◎32. 祖父母・孫の面倒</li> <li>◎35. 地域の人達は助け合うべき</li> <li>◎45. 市町村の趣味的学習・スポーツ奨励への援助必要</li> <li>◎53. 大学や研究所を住民望む</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×15. 地域つながりが薄くなった</li> <li>×21. 子供・束縛せずに育てるべき</li> <li>×34. 老人は老人だけで</li> <li>×46. 浜岡町・成人学習活動盛ん</li> <li>×47. 勉強機会や場、浜岡町多い</li> <li>×48. 気軽に図書館(室)などで勉強する雰囲気町民にある</li> <li>×49. 町民は大学や短大で勉強する意欲ある</li> <li>×50. 学習情報容易</li> <li>×55. 浜岡町は文化施設十分</li> <li>×56. 浜岡町は体育・スポーツ施設十分</li> </ul>
「新住の若い専門家グループ」11.1%	<ul style="list-style-type: none"> <li>○4. テレビ・ラジオ</li> <li>○5. 通信教育</li> <li>◎23. 健康のため、自分一人で運動</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>◎13. 趣味・楽しみに時間・経費惜しむな</li> <li>◎15. 地域つながり薄くなった</li> <li>◎22. 婦人も職業をもった方が良い</li> <li>◎39. 父は子の教育かわるべき</li> <li>◎40. スポーツ試合勝負</li> <li>◎41. スポーツ練習技量</li> <li>◎42. スポーツは健康</li> <li>◎44. 趣味やスポーツ経費自己負担</li> <li>◎52. 学校を地域に開放</li> <li>◎54. 学級や講座・教育委員会で開け</li> <li>◎58. 地域よりも個人的事情を優先</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>×3. 学歴より実力</li> <li>×28. 青年期・勉強や仕事に打ち込むべき</li> </ul>

表 4 - 4 (3)

	学 習 行 動		学 習 意 識	
	参加率の高い項目	参加率の低い項目	肯定率の高い項目	肯定率の低い項目
「るんるんギヤル・ママグループ」13.1%	全て低い行動率	<ul style="list-style-type: none"> <li>× 5. 通信教育</li> <li>× 4. テレビ・ラジオ</li> <li>× 6. カルチャーセンター(0)</li> <li>× 9. 所属団体の研修会・講習(21%)</li> <li>× 10. 研修・視察・旅行(11%)</li> <li>× 14. スポーツ・観戦(18%)</li> <li>× 18. 新聞・雑誌などに発表</li> <li>× 20. ボランティア活動</li> <li>× 21. 趣味のグループで勉強(6%)</li> <li>× 22. スポーツ・サークル・運動(9%)</li> <li>× 23. 健康のため、自分一人で運動(14%)</li> <li>× 25. 公民館・集会所、町民会館などに行った(29%)</li> <li>× 26. 祭りに行った(36%)</li> <li>× 27. 地域体育祭・文化祭などに行った(16%)</li> <li>× 28. 地域の清掃活動・防災活動(6%)</li> <li>× 29. 青少年のための活動に参加(5%)</li> <li>× 30. 地域の団体の会合に出た(6%)</li> <li>× 31. 地区や班・町内会の会合に出た(11%)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 5. 生活便利で勉強あまり必要なし</li> <li>◎ 16. 近隣付き合い面倒</li> <li>◎ 21. 子供・束縛せずに育てるべき</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>× 1. 社会の変化・激しい</li> <li>× 6. 仕事の勉強しなければ置き去り</li> <li>× 7. 仕事のため無理にでも勉強</li> <li>× 8. 資格や免許とっておく</li> <li>× 9. 日常生活、知識・教養必要</li> <li>× 10. 生涯学習必要</li> <li>× 18. 子供・クラブ活動熱心よいこと</li> <li>× 19. 子供・地域活動参加すべき</li> <li>× 20. 子供・家庭で手伝いさせるべき</li> <li>× 23. 主婦・婦人会や婦人学級参加望ましい</li> <li>× 24. 主婦・趣味やスポーツ、良いこと</li> <li>× 25. 主婦・家事や育児が最も大切な仕事</li> <li>× 26. 団・サークルの青年好ましい</li> <li>× 27. 高・大生は地域活動参加すべき</li> <li>× 31. 老人・知恵や能力を社会に</li> <li>× 36. 地域活動参加大切</li> <li>× 37. 地域会合出席</li> <li>× 39. 父は子の教育にかかわるべき</li> <li>× 42. スポーツは健康</li> <li>× 43. スポーツ良き仲間</li> <li>× 45. 市町村の趣味的学習・スポーツ奨励への援助必要</li> <li>× 51. 浜岡町文化活動盛ん</li> <li>× 52. 学校を地域に開放</li> <li>× 53. 大学や研究所を住民望む</li> <li>× 54. 学級や講座・教育委員会で開催</li> <li>× 57. 地域の公民館・集会所は地域の十分活用</li> </ul>

表 4 - 4 (3)

「土地っ子若い衆グループ」17.6%	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 5. 通信教育</li> <li>◎ 7. 免許・資格・学校</li> <li>◎ 8. 免許・資格・個人</li> </ul>		特に顕著な肯定的意識はない	<ul style="list-style-type: none"> <li>× 14. 仕事はほどほど・のんびり</li> <li>× 33. 老後のために特技を身に付けておく</li> </ul>
「活躍する中年婦人グループ」17.5%	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 1. 学級・講座参加</li> <li>◎ 2. 先生習いごと</li> <li>◎ 6. カルチャーセンター</li> <li>◎ 16. 文化祭等に出場</li> <li>◎ 17. 文化祭・作品・出品</li> <li>◎ 21. 趣味のグループで勉強</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ 8. 資格や免許とっておく</li> <li>◎ 23. 主婦・婦人会や婦人学級参加望ましい</li> <li>◎ 42. スポーツは健康</li> <li>◎ 47. 勉強機会や場、浜岡町多い</li> <li>◎ 51. 浜岡町文化活動盛ん</li> <li>◎ 55. 浜岡町は文化施設十分</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>× 30. 青年・多少行き過ぎ容認</li> <li>× 38. 父・夫は家事無し当然</li> </ul>

「土地っ子若い衆グループ」も17.6%と二番目に大きいグループである。

ただし、「新住の若い専門家グループ」はいずれの項目も○印である。その理由は、このグループには他のグループと比較して参加率が最も高い学習行動はなく、その特性を把握するために、参加率が二番目であっても一番目と差が少ない学習行動項目を拾ったからである。

さらに、二番目の参加率の学習行動項目すら全くないのが、「るんるんギヤル・ママグループ」である。しかもその住民比率は13.1%で、決して小さくはない。

成人調査のために用意した31の学習行動項目とは、「25. 公民館、集会所、町民会館などに行った」に代表されるように、地域での学習機会の可能性を可能な限り広範囲に捉えるために、かなり広義の学習概念のもとに準備した項目である。それも、一年に一回でも参加すれば「行動した」としてカウントされる質問である。従って、31種がかなり分散する形で類型が形成されることを予想して調査を行った。

しかし、実際には、この調査結果が示すように、どうも特定の人達に学習行動は集中するようである。加えて、学習行動への参加率が高い項目が多いグループは、そのグループに所属する人達の占める割合が示すように、量的には必ずしも町全体の多数派ではないという傾向が見られる。

特に、「るんるんギャル・ママグループ」の存在は意外であった。調査のために用意した学習行動項目では、いずれにも参加する率が低いという消極的な側面でしかこのグループに所属する人達の特性をとらえることができなかったわけである。いいかえれば、調査が前提とする地域での生涯教育の機会の外側で、このグループに所属する人達は生活していることになる。

加えて問題なのは、このグループは8グループ中で4番目の大きさであることから、決して少数派とはいえないことである。むしろ、上で述べたように、全体的に参加率の高い学習行動項目が少ないグループの方が、町民に占める比率は高いことを考えれば、この「るんるんギャル・ママグループ」こそ、地域社会とそこで生活する人達との関係を考える上での課題を暗示しているグループかもしれない。

先に指摘したように、浜岡町の有識者と成人との間にはかなり傾向に差があった。この差が、実は、従来、当然参加すべきものとして考えられてきた地域での活動や学習機会に対して、「インテリシルバーグループ」に代表される参加率の高い類型に属する住民と、「るんるんギャル・ママグループ」を典型とする参加率の低い類型の住民との差であるのだろうか。

この点に注目しながら、上の比較では類似した傾向として捉えられたグループを、改めて相互に比較しながら、各グループの学習行動・意識の内容上の特性を把握したい。そして、その過程において、生涯教育の推進において考慮すべき課題について考察していきたい。

## (2) 各グループの学習行動や意識内容の特性と課題

### ① 「頼れるお父さんグループ」対「インテリシルバーグループ」

浜岡町全体では少数派だが、参加率の高い学習項目の数が多いのが、「頼れるお父さんグループ」と「インテリシルバーグループ」である。

まず、この二つのグループを参加率の低い学習行動項目数で比較すると、「頼れるお父さんグループ」は7項目と多いが、「インテリシルバーグループ」は0項目と対照的である。

学習行動の内容をみると、「頼れるお父さんグループ」は、スポーツや地域活動へは積極的だが、個人でも集団でも、明確な目的をもって行う狭義の学習に参加する人が非常に少ないことがわかる。

表4-4(4)

	学 習 行 動		学 習 意 識	
	参加率の高い項目	参加率の低い項目	肯定率の高い項目	肯定率の低い項目
「インテリシルバーグループ」7.3%	◎3. 図書館 ◎4. テレビ・ラジオ ◎5. 通信教育 ◎6. カルチャーセンター ○9. 所属団体の研修会・講習 ◎10. 研修・視察・旅行 ◎11. 講演会 ◎12. 音楽会などに行く ◎13. 展覧会 ◎15. 美術館・博物館 ◎17. 文化祭・作品・出品 ◎18. 新聞、雑誌などに発表 ○20. ボランティア活動 ◎23. 健康のため、自分一人で運動 ◎24. 趣味・関心・一人で勉強 ◎25. 公民館、集会所、町民会館などに行った ◎28. 地域の清掃活動・防災活動 ◎31. 地区や班・町内会の会合に出た		◎3. 学歴より実力 ◎6. 仕事の勉強しなければ置き去り ◎7. 仕事のため無理にでも勉強 ◎10. 生涯学習必要 ◎11. 自由な時間(余暇)増える ◎19. 子供・地域活動参加すべき ◎25. 主婦・家事や育児が最も大切な仕事 ◎27. 高・大生は地域活動参加すべき ◎28. 青年期・勉強や仕事に打ち込むべき ◎31. 老人・知恵や能力を社会に ◎33. 老後のために特技を身に付けておく ◎37. 地域会合出席 ◎44. 趣味やスポーツ経費自己負担 ◎48. 気軽に図書館(室)などで勉強する雰囲気か町民にある ◎55. 浜岡町は文化施設十分	×2. 社会の変化・大変 ×22. 婦人も職業をもった方が良い ×29. したいことできる青年のみ ×32. 祖父母・孫の面倒 ×40. スポーツ試合勝つ ×41. スポーツ練習技量

「インテリシルバーグループ」の場合は、地域に関係する活動や学習への参加率では、「頼れるお父さんグループ」と同様に高いが、スポーツに関する項目には特に高いものはない。その代わり個人で学習する行動項目は非常に多い。

これらの点から、「頼れるお父さんグループ」は“勉強よりも運動”であり、「インテリシルバーグループ」は、“運動よりも勉強”というのが特徴のように思える。

ところが、学習意識の面でみると、「頼れるお父さんグループ」は、全員「日常生活、知識・教養必要」と答えている。このことに代表されるように、このグループは、むしろ学習に対する要求度は非常に高い。その一方で、「浜岡町・成人学習活動盛ん」「勉強機会や場、浜岡町多い」などの浜岡町の現在の学習状況に対する肯定度に関しては、それに同意する程度は非常に低い。

他方、積極的に行っているスポーツについては、「趣味・スポーツ奨励への援助必要」の肯定度が高く、「スポーツ施設十分」への肯定度は低い。したがって、浜岡町の現状への評価は、やはり全体として低い。

また、女性に関する意識では、「主婦・趣味やスポーツ良いこと」の肯定度が高く、女性が家事意外に活動することを評価している。

さらに、「団・サークルの青年好ましい」あるいは「地域の人達は助けあうべき」への肯定度が高いものの、「地域つながり薄くなった」の肯定度が低いことが特徴的である。

「インテリシルバーグループ」の場合は、「頼れるお父さんグループ」と異なり、行動と同様に意識の面でも学習の必要性を強調する項目の肯定度は高い。また、「気軽に図書館（室）などで勉強する雰囲気」があり「文化施設十分」と、浜岡町全体の学習状況に対しても肯定度は高い。

ただし、「趣味・スポーツ経費自己負担」を肯定し、スポーツに関して、「試合に勝つ」「技量」を高めることへの肯定度は低い。この面で

も「頼れるお父さんグループ」と対照的である。

あるいは、女性に関しても、「頼れるお父さんグループ」と異なり、「家事・育児」に専従することを肯定する意識が強く、「職業をもつ」ことへの肯定度は低い。

また、「したいことができる青年」への評価が低く、「高・大生」や「子供」の地域参加を評価している。

さらに、「インテリシルバーグループ」の特徴をより一層示すのは、「老人の知恵を社会に」や「老後のために特技を」に肯定度が高く、逆に「祖父母が孫の面倒をみる」の肯定度が低いことであろう。

ところで、図-1で示したように、「頼れるお父さんグループ」は、浜岡育ちでの三十代後半、地域で積極的に活躍する男性が典型である。「インテリシルバーグループ」は、浜岡での生活が長く、学歴の高い高年齢の男女であり、現在の浜岡のリーダー、というのがネーミング（意味づけ）の理由である。このネーミングの特色と上記の相互の行動と意識の特性を重ねて考える時、より明確にその問題の所在が把握できよう。

すなわち、「頼れるお父さんグループ」は、まさに「頼れるお父さん」として、三十代後半の地元出身が中心であるとすれば、浜岡町はかつて自分が育ち、今また家族を支え子供を育てる場である。とすれば、浜岡町の現状への不満の多さは、浜岡や地域に対する拒否意識ではなく、むしろ積極的な愛着故といった方が正しいのではないか。

町全体や自分が生活する地域の現状改革への意欲の高さに反し、それを実現するための方法や時間的余裕がないこと、あるいは責任・立場とのギャップへのいらだちが、現状批判として現れているとも解釈できる。

逆に「インテリシルバーグループ」が、地域での活動や学習に積極的であること理由は、現在の浜岡町のリーダーであるという立場を背景とした、現状への肯定意識（自負）に支えられたものではないか。

また、主婦や老人のあり方への意識に見られるように、一方で伝統的な価値を持ちつつ、他方で高齢者が時代の変化に能動的に対応することを肯定する意識に支えられた積極性でもあると考える。

したがって、両グループは、地域との関わりに関しては類似した行動をとるものの、その行動の意味は相互にかなり異なるものとする。

また、「頼れるお父さんグループ」は、自分ではとてもやっているとは思えないにもかかわらず、浜岡町の現在の学習状況への評価が低い。逆に、積極的に学習している「インテリシルバーグループ」の現状への評価は高い。このことは、意識と行動の関係を見る上で非常に興味深い。

たとえば、仮に、「頼れるお父さんグループ」には、自分達の意欲・ニーズと浜岡の学習機会が適合的ではなく、「インテリシルバーグループ」には適合的であるとする。他方、一般的には浜岡の施設はかなり優れていると考えられる。とすれば、「頼れるお父さんグループ」のニーズに応えるためには、従来の整備の延長線上ではなく、施策の質的な転換が必要になると考えられる。さらに、学習をしていないということが、そのまま学習ニーズがないことではなく、また、必ずしも学習意欲が浜岡町の生涯学習を推進するための改革に結びついていない、ということを示唆しているとも考えられる。

## ②「活躍する役職おじさんグループ」対「活躍する中年婦人グループ」

共に参加率の高い学習行動項目が6であるのが「活躍する役職おじさんグループ」と「活躍する中年婦人グループ」である。

もっとも、「活躍する役職おじさんグループ」には、参加者が0か1～2人という行動が9項目あるのに対し、「活躍する中年婦人グループ」は0である。その行動内容をみると、「活躍する役職おじさんグループ」は、地域関係の学習機会には非常に積極的に参加するが、「頼れるお父さんグループ」と同様に個人で行う狭義の学習は行っていないことがわかる。

それに対して、「活躍する中年婦人グループ」の参加率が高い学習行動項目は、「文化祭」に「出場」や「出品」に代表されるように、地域を舞台とする集団で行う場合が多く、積極的で狭義の意味での学習である。

そして、図4-1にあるように、「活躍する役職おじさんグループ」の典型は、地域活動に熱心な中高年の男女で、農業に従事する地域有力者である。「活躍する中年婦人グループ」は、地元の中年以上の主婦が中心で、地域での学習活動に最も熱心な人達である。

意識の面でも、年配の地域有力者が典型である故か、「活躍する役職おじさんグループ」は、地域組織の活動に積極的に参加していることを反映し、公民館や集会所等の施設活用を評価する一方で、「近隣つき合い面倒」への肯定度が最も低い。

加えて、このグループの特色は、「祖父母が孫の面倒」「老人は老人だけ」の項目である。「父・夫は家事なし当然」も含めて、伝統的な男女観や高齢者の立場への関心が高いことは、「インテリシルバーグループ」と類似している。しかし、「特技」によりも「孫の面倒」の方に高齢者の生き甲斐を見出すタイプの人が多い点で、「インテリシルバーグループ」とは異なる。

地域での学習活動に積極的な婦人を典型とする「活躍する中年婦人グループ」の意識は、やはりその行動を反映してか、浜岡の「文化活動」「学習施設」「学習機会」に対する評価は非常に高い。また、年齢や立場故か、婦人の「婦人会や学級への参加」を肯定する一方で、「青年の行き過ぎ」には寛容だが、「父・夫は家事なし」への同意者は少ない。

どうも、地域への積極性といっても、地域組織での活躍と学習活動への参加とはかなり異なる意味があるようだ。そして、その理由が、「活躍する役職おじさんグループ」と「活躍する中年婦人グループ」の差に見られるような、性差や地域での立場の差に求められるとする

ならば、その解消が地域住民の生涯学習拡大にとっての重要な課題となるのではないか。

さらに、「活躍する役職おじさんグループ」にとって、地域での活動がどこまで自己の成長や地域の改善という意味での学習の契機になっているであろうか。従来の習慣の維持や仲間との交流のみに終わっていないかどうか考える必要があるのではないか。そしてこのことは、「活躍する中年婦人グループ」の学習活動への参加の意味にも問うことができる。

すなわち、生涯教育を地域において展開する場合には、「地域」「地域組織」「地域活動」「学習」の意味とそのあり方を、新たに問い直さなければならないことを、地域での活動と学習が分離した両グループの差は暗示していないだろうか。

そこで、この点にも配慮しつつ、地域に対して必ずしも積極的でないグループに目をむけたい。

### ③「がんばる母さんグループ」対「新住の若い専門家グループ」対「土地っこ若い衆グループ」

参加率が高い項目が3個しかない「がんばる母さんグループ」、「新住の若い専門家グループ」、「土地っこ若い衆グループ」の場合、低い参加率の学習項目をみると、次のような特徴が指摘できる。

まず、「がんばる母さんグループ」には、参加率の低い学習項目として個人と集団いずれも狭義の学習行動が5項目並んでいる。それに対して、「新住の若い専門家グループ」や「土地っこ若い衆グループ」には0である。

参加率の高い学習行動の内容も対照的である。たとえば、「がんばる母さんグループ」の場合、つきあい程度に地域活動へ参加する以外は何もやっていないのに対し、「新住の若い専門家グループ」と「土地っこ若い衆グループ」は、いずれも個人で行う明確な目的をもった学習への参加であることがわかる。

「がんばる母さんグループ」とネーミングしたのは、三十代後半の子育て真最中の女性が多いためである。学習行動の低さは、子育て故の忙しさを反映しているのであろうか。

ところで、「がんばる母さんグループ」は、ほとんど学習らしいことはやっていないが、意識の面では、「18. 子どものクラブ活動熱心よい」や「20. 子どもには家庭で手伝いさせるべき」と、学校に通う時期の子どもの教育への関心が高いことが特徴的である。また、地域活動の意義を肯定することに加え、仲間づくりとしてスポーツを位置づけ、そのために利用しているのか、浜岡の体育施設への評価は高い。

民間の教育機関や既存の公教育と異なるという意味での地域での学習の特性とは、その学習内容や学習機会が住民の日常生活に直結するニーズに応えうるものかどうかではないか。その意味で、小・中・高と進む子どもの教育やしつけに最も悩むことの多い「がんばる母さん」の学習ニーズや時間帯に、地域の学習機会が適したものであるかどうか、問われなければならないであろう。「がんばる母さん」には、学ぶ意欲がないのではなく、日々の忙しさを切り詰めても学ぶに足る内容や場が見出せない、というのが実体でなければよいが。

「新住の若い専門家グループ」は、浜岡に新しく住むようになった高学歴の若者が典型である。先に述べたように、このグループは個人で行う学習行動が特徴的であった。意識の面ではどうか。

「趣味・楽しみに時間・経費惜しむな」の評価が高く、「青年期には勉強や仕事打ち込むべき」への評価が低い。また、「試合勝つ」「練習技量」等のスポーツへの評価が高い。これらのことから、このグループは遊び志向が強いグループであるようだ。

また、「地域のつながり薄くなった」として、「地域よりも個人的事情を優先」すると考えている。男女観では、「婦人も職業をもった方がよい」「父は子の教育にかかわる」などの意識の肯定度が高い。

学歴が高く地域や伝統から自由な若者、という姿が、「新住の若い専

門家グループ」の特徴として見えてくる。

さらに注目すべきことは、「新住の若い専門家グループ」の場合、地域活動への参加率が低く、地域より個人を優先する意識が高いものの、地域での学習自体を否定してはいないことである。むしろ、「学校を地域に開放」や「学級・講座を教育委員会で開け」に対する肯定度が最も高いことから、学習ニーズを満たす場として、身近な地域の施設の利用を最も積極的に望んでいるグループともいえる。

それに対して「土地っこ若い衆グループ」は、他のグループに比較して特徴的な意識はない。このグループには、浜岡生まれの若者が多い。それにも関わらず、際立った特色をもたないとすれば、そのこと自体が特色であり問題でもあるといえるかもしれない。意識が自己の立場の何らかの反映だとすれば、肯定否定を問わず特別な意識をもたなくてもすむ立場は、その機会や能力において、現状に積極的に関わる可能性が少ない立場とも考えられるからである。

浜岡町には様々な人達が生活している。その中で、地域において、積極的に自己の生活様式や価値意識を表現する人としらない人の差が、地元育ちと新しく住むようになった人にある差異、あるいは年齢や性などの属性上の差異によるものであるとすれば、ここにも今後の課題が存在するといえる。そしてその問題が集中しているのが「るんるんギャル・ママグループ」であろう。

#### ④「るんるんギャル・ママグループ」が意味する問題

我々が地域での学習の可能性を最大限考えて用意した学習行動のいずれにも積極的な参加が見られなかったのが、「るんるんギャル・ママグループ」であった。特に、地域に関する活動や学習機会への参加率が極端に低いのがこのグループの特徴である。このことは学習意識の面でも確認できる。

まず、肯定度が高いのは、「生活便利でありあまり勉強必要なし」と「近所づきあい面倒」である。学習行動全般への積極性と地域活動への不

参加に対応している意識と考えられる。

また、肯定度の低い項目を見ると、やはり学習の必要性を強調する項目や地域に関わる項目が並んでいる。特に、地域への参加が関係する行動は、子ども、青年、主婦と全ての立場で肯定度は低い。加えて、子どもの育て方や主婦のあり方に対して、「がんばる母さんグループ」と異なり、「子どもは束縛せずに育てる」の肯定度が最も高く、逆に、子どもが「クラブ活動」や「地域活動」に参加し「手伝いさせる」ことへの肯定度は低い。

このグループの典型は、浜岡育ちの未婚の女性や浜岡に新たに住むようになった若い主婦など、いずれも二十代の若い女性である。

多分、どの地域にもこのようなグループは存在するのではないか。そしてその扱い方に苦慮している地域リーダーも多いのではないか。しかし、このグループが我々に教えることは、先述したように、現在の地域で行われている学習機会では、そのニーズに応ええないという事実であって、このグループには学習意欲がないということではないと考える。

むしろ逆に、このグループの人達が地域に対して積極的であるとするならば、先ず、この人達にとって地域がどのような意味を持つかを問うべきであろう。地域への積極的な関わりは、地域活動への強制ではなく、地域と関わることへのメリットの自覚を通じて培うべきものであろう。その意味で、このグループは、現在の地域が、その土地に新たに住むようになった若いお母さんや、そこで生まれ育った若い女性に対して、どのようなメリットを与えてきたかという観点から見直す必要性を教えていると考える。

地域における生涯教育推進の今日的課題は、「るんるんギャル・ママグループ」に属する人達のニーズへの対応、あるいは、その積極性を引き出す方法や機会の創造に集約されるといえば言い過ぎであろうか。

さらに、「るんるんギャル・ママグループ」を巡って提起された地域

課題への視点は、地域への行動や意識の積極性の有無に関わらず、全てのグループに向けられねばならないと考える。なぜなら、たとえ地域活動に積極的であっても、「活躍する役職おじさんグループ」や「インテリシルバーグループ」の地域活動と「頼れるお父さんグループ」の地域活動の意味、あるいは「がんばる母さんグループ」の地域活動への意識の間にはズレがあったからである。また、地域活動には消極的だが地域での学習活動自体を拒否しているわけではない「新住の若い専門家グループ」の存在。地元の若者が多いにも関わらず、ほとんど特徴的な意識や行動を示さない「土地っこ若い衆グループ」の存在。これらのグループにとっても、地域とその活動やそこでの学習の意味は異なるからである。

逆に、このようなグループそれぞれの地域との関係の間にある差異を無視して、一方的に地域活動を行ったり、地域活動の意義を強調しても、そのこと自体が地域から多くの人達を離反させる原因になる可能性があることを指摘しておきたい。

少なくとも、従来の地域観や地域活動のあり方を前提とする限り、町の現状を肯定し積極的に参加するのは、いずれも年配者の比率が高い「活躍する役職おじさんグループ」と「活躍する中年婦人グループ」と「インテリシルバーグループ」にすぎない。その町民全体に対する比率は、3グループ合わせても32.3%、三人に一人である。

その一方で、今後の浜岡を担うべき「がんばる母さんグループ」や「頼れるお父さんグループ」の不満を高め、未来の浜岡を託すべき「土地っこ若い衆グループ」、「新住の若い専門家グループ」、そして「るんるんギャル・ママグループ」が地域活動は無視もしくは拒否することを避けえないおそれがあることもまた指摘しておきたい。

この成人調査のコンピューターによる分析には、静岡放送（株）情報システム局の渡辺治彦氏の協力を得たことを記して感謝の意とする。

#### 4. 多様で異質な学習機会を

学習行動・意識に関するこれらの調査を基に、浜岡町の教育課題として第一に提案したことは、「古くからこの町に住んでいる人、新しく住むようになった人を含め、いろいろな考え方、態度、行動をする人々を、互いに認め合い、受け入れあい、それぞれのタイプの人々が、その特性を生かし、協力して活力ある地域づくりのできる仕組みを確立すること」であった。

学校に行きたくても行けなかった時代には、行ける学校ができたというだけで誰にでも喜ばれた。それと同じように、成人にとっても、何かを学びたくても学ぶ手掛かりが全くなかったころでは、どんなものでも学ぶ機会ができたということはそれだけで素晴らしいことであった。たとえ強制された学習でも、それによってより苛酷な労働から一時的にせよ解放されるなら、それは歓迎されることであった。貧しく選択肢の少ない状況のなかでは、教育（学習）の機会が与えられるということは、それだけで恵まれたことと考えられた。

しかし、マスコミの発達によって存分に情報が提供され、交通機関の発達と交通手段の多様化によって行動の範囲が拡大し、民間のいわゆる教育産業を含め、さまざまな教育（学習）機会が身近に存在しているという状況のなかでは、人々の学習行動も当然異なったものとなる。学習機会がふんだんにあるから、かえって学習に対するどん欲さが失われ、あるいは、必ずしも適切ではない学習をするということがあり得る。また、「望ましい」とされる教育（学習）、「かくあるべし」とされる教育（学習）に人々の関心が向けられるとも限らない。調査結果は如実にそのことを示している。

たしかに、地域社会において人々が安全で安心した生活を営むためには防災、交通安全、環境保全、青少年育成等、住民が相互に協力し

あわなければならない（そのための学習が求められる）という問題がある。しかし、日常生活の中で、これらの活動に向けられる時間は必ずしも多くないし、都市化の進展と制度の充実、職務の分業化、専門化によって、それが望ましくないにしても、だれもがそれらの活動に積極的に参加しなければならない事態は、ほとんどみられなくなってきている。

経済的にも物質的にも豊かさが増大し、社会生活における行動の仕方が多様化し、社会的な許容度が広がるにしたがい、人々の学習行動（地域活動への参加を含めて）の選択肢が広がる。そこでは、例え他者から見て望ましくない選択をしても、明らかに公共の福祉に反するものでない限り、選択する者の判断にゆだねざるを得ない（その結果についての責任は当然それを選択した者の責任に帰せられるが）。

学習行動（地域活動を含む）は、その方がよい結果が得られるとわかっていても、基本的には学習者に強制されるものではない。それゆえ、従来、いや応なく参加しなければならないという状況のなかで行われていた学習を学習者が自発的に積極的に行う学習に転換しなければならないという問題が生じてくる。

従来、多くの場合、地域での学習機会は旧来の地域組織と地域活動への同化を前提として計画・実施され、計画の企画推進も長くその地に住む高齢者や地元有力者が多く、必ずしも分化した多様な層の意見を反映できる組織とはなっていなかった。

本来、地域生涯教育計画の目的は住民の学習機会の保障とともに、学習を通じたコミュニティーの再形成にある。それゆえにこそ地域生涯教育計画の第一の課題は地域住民を一元的な地域同化としてではなく、異質性・多様性を前提とした統合の方法や仕組みの創造であることを改めて認識しなければならない。

## ●第五章●

# 子どもの問題行動をめぐる

## 親子の関係

### 1. 子どもの問題行動に関する意識調査

さまざまな問題行動をめぐる、浜岡に住む中学生たち（886名）とその親たち、及び高校生（1086名）による問題性の認識と経験の有無に関する調査を行った（1986年11月）。その結果、次のような結果と知見を得ることができた。ここで得た知見をもとにして、現代日本の家庭における子と親の認識のズレをめぐる諸問題についての、より広範囲にわたる考察へ発展させてゆくことができるだろう。

調査方法は、質問紙調査によった。ここで用いた質問は、次のとおりである。

（生徒・中学生／高校生にたいしては）「あなたは、「A. 学校」や「B. 授業中」や「C. 学校の外」で、つぎのようなことを「中学生／高校生がやる」のをどう思いますか。また、「あなたはやったこと」が

## 地域における生涯学習の展望

周知のように、「生涯学習体系への移行」という教育政策は、21世紀を視野におき、現代日本の社会の急激な変化に応じた新たな教育のあり方を求めて、文部省より提起されたものである。しかし、それは、学校教育や社会教育として、日本の各地で行われている教育実践を一斉に同じように変えることではない。むしろ、そのような画一的な日本の教育システム自体の改変が、生涯学習体系への移行として提起されている教育改革が意図する最も大きな課題である。

それぞれの地域の状況に応じて新たな教えと学びの在り方をいかに創造するか。これが生涯学習という教育のあり方の核にあると考える。

しかし、そのことをふまえた上で重要になるのは、生涯学習の理念についての共通理解である。なぜなら、生涯学習の施策が地域の状況に即して独自に具体化されるためには、その構想力や創造力の基盤として、また施策の適否を判断する基準として共通のものさしが必要だからである。

そのため、全国様々な地域社会の実体に即した生涯学習を促進する上で、市町村教育委員会が果たすべき問題は多い。特に、多くの市町村で実際に地域を基盤とした生涯学習の推進に当たっているのは、社会教育担当者であると思われる。従来から地域住民の学習ニーズに応えるための施策がとられてきた社会教育行政の役割はこれまでもまして重要であると考えられる。

そこで、浜岡町での調査研究の成果をふまえ、地域社会に根ざした生涯学習を推進するうえでの課題を、地方社会教育行政の役割を中心に、まとめておきたい。

## 1. なぜ“生涯学習”なのか

静岡県では、昭和63年度から三ヶ年計画で県内の全市町村において生涯学習推進大綱を策定する施策を推進した。このことに代表されるように、今日では、“生涯教育”よりも“生涯学習”という概念が一般的に使用される場合が多い。しかし、日本にこのような教育と学習のあり方が紹介された当時は“生涯教育”が一般的であった。

よく知られているように、“生涯教育”が世界的に新たな教育の原理として注目されたようになったのは、1965（昭和40）年、ユネスコでの「成人教育会議」における、P.ラングランを中心とする提案・討議を契機としてである。

日本においても、昭和40年代にこの論議を始めとして生涯教育に関連する数多くの欧米の理論が紹介され、主として社会教育の分野を中心に具体化が図られてきた。その中心が昭和46（1971）年に出された社会教育審議会答申である。また、静岡県にあっては、昭和55年度よ

り「地域学習」として実践化が進められ、より地域住民の生活に即した学習活動や学習機会を保障する施策が実施されてきた。

それがなぜ、今日、改めて生涯学習として提起されているのか。

その直接的な理由は、いうまでもなく、臨時教育審議会での論議である。また、その答申を受け、文部省に筆頭局として置かれた生涯学習局が中心となって、「生涯学習体系への移行」というより広範な教育政策の具体化が図られてきていることであろう。

しかし、より重要なのは、このような政策を必要とした教育と学習を取り巻く状況の変化である。臨教審や文部省が提起したから生涯学習が必要なのではなく、そのような施策を要求する条件が、各地に地域独自の課題として存在するからである。

## 2. 学習者のニーズを中心とした施策を

その一つは、実際に、数多くの人達により生涯にわたる学習が広範に実践されるようになり、改めて教育する側ではなく学習する側のニーズを中心とする施策が必要となってきたことである。

すなわち、生涯教育が提唱されたのは昭和40年代である。以後20年以上の時間が経過した。その間の日本の社会の変化は、二つのオイルショックを経て、高度経済成長期にもまして大きく変化した。その中で、既存の学校教育以外においても、数多くの学習がかなりの人達により実際に進められるようになってきた。

たとえば、文部省や県・市町村教育委員会による社会教育施策に加え、首長部局をはじめ、他の行政機関や各種公的な機関により事業化される学習機会が飛躍的に増加した。

また、産業創造の変化に対応するために、企業内教育の多様化・高度化が進む一方で、新たな職業を得るために必要な資格付与を目的とする通信教育などの学習機会の増加も無視できない。

さらに、カルチャーセンターを典型に、マスコミを代表とする情報産業の学習分野への進出や各種情報機器の普及、そしてそれらを必要とするライフサイクルの変化による新たな学習ニーズの誕生などもよく指摘されることである。特に、都市における学習活動の多様化と高度化の進行は速いといわれる。

そして、このようなさまざまな場での学習状況の変化に共通するのは、教育する側の立場ではなく学習する側のニーズに即して学習機会が整備・創造されていることである。

この学習者のニーズの重視が、“生涯教育”から“生涯学習”へと名称が変えられて用いられるようになった最も重要な視点の変化であると考えられる。したがって、あえて“生涯教育”ではなく“生涯学習”と記する教育施策のポイントは、どのようにすれば、学習者のニーズに適合する学習機会を準備することができるかにある。

そのためには、住民の学習実体をいかに多面的に捉えるかが課題となる。全国各地で生涯学習に関する調査が数多く実施されている理由もそこにある。静岡県内でも、推進大綱策定事業の一貫として、多くの市町村でアンケート調査が実施された。

もっとも、本当に正確に地域住民の学習ニーズを捉えることはそれほど簡単なことではない。

その理由の一つは技術的な問題である。一人ひとりの顕在的潜在的学習ニーズを多面的に捉える調査を実施するには、かなりの予算と調査技術が必要である。

さらに、一人ひとりの学習ニーズを詳細に把握しようとするほど、個人の価値観やプライバシーにふれる場合が出てくる。あるいは、このことを含めて、公的機関の立場として、私的で多種多様な学

習ニーズをどこまで把握し対応するかが問題となる。これがもう一つの理由である。

もっとも、上述したように、公的機関が担っているかどうかは別として、既に様々な機会を利用して学習が進んでいることは明らかである。そして、その中に、現時点での住民の学習ニーズの一端が顕在化していることも明らかである。

したがって、現在、地域を基盤として生涯学習を推進するためにはまず必要なことは、様々な学習機会を利用して行われている住民の学習実体を可能な限り広範に把握することである。そのためには、公的機関によるものか民間の機関によるものかに関わりなく、また当該行政区域内にあるかどうかではなく、通勤・通学地を含めて地域住民が日常的に利用可能であるかどうかという基準から、学習の場が把握されなければならない。

また、生活者としての学習である以上、その学習内容も、地域活動からカルチャーセンターでのエアロビクスや企業による研修旅行まで、幅広く考える必要がある。

そして、このように現に実践されている学習の実態を踏まえた上で、それをどのように評価し、補い、高めるか。このような視点から、地域住民個々の学習条件に焦点を合わせたきめ細かな学習機会づくりが、生涯学習推進に当たっての行政として担うべき第一の役割であると考えられる。

### 3. 学校教育との連携を

ところで、このような学習者のニーズを中心とする教育のあり方は、

これまでの学校教育と質的に大きく異なる。

学校はあらかじめ定められた教育内容（教科書）を、一定の時間内（時間割り）に、特別な部屋（教室）の中で、教師が生徒に、等しく教えることを中心とする教育である。このシステムは日本の近代化を実現する上で見事に機能し、今日の豊かな社会を築く基盤となった。

しかし、学校の教育力が優れていればいるほど、新たな時代の要請に応じてフレキシブルに対応するためには、多くの困難が伴う。今日、急激に進行する情報化、国際化、個性化、高齢化などの新たな社会変化を前にして、学校はこれまでの教育のあり方を変えざるをえない状況にある。

すなわち、文部省による「生涯学習体系への移行」は、学校卒業後の教育の問題ではなく、学校教育を含めた文字通り生涯にわたる教育体系全体の改変を意図したものである。

このことが、“生涯教育”から“生涯学習”へと変わった二つ目の理由である。

先述したように、生涯教育が日本に紹介された時点では、主として社会教育の課題として捉えられた。その後の実践も、どちらかといえば、学校教育的な教育のあり方を、学校以外の場にも広く保障していくことを目的として展開された。

しかし、問題は学校教育自体である。生涯にわたって人間は学び続ける存在であるという視点から、学校教育をいかに再編成するか。このことが、臨教審での論議の中心であり、平成元年三月に告示された新学習指導要領の柱の一つに、「開かれた学校」があげられている理由でもある。

したがって、地域において生涯学習を推進する上で、今後、新たに重視しなければならないのは、小学校や中学校や高等学校との連携である。とりわけ、地域（組織）の単位と学校区が重なることの多い小学校や中学校との連携は、学区を子ども達にとっての実質的な地域す

なわち生活の場にするためにも、極めて重要である。

もっとも、これまでも学校と地域の連携の必要性については度々指摘されてきた。だが、その多くは非行対策（補導）や学校施設利用に関することを中心とするものではなかったか。上述したような生涯学習の視点により、学習主体である子ども自身のニーズに応じた活動や条件整備が整えられてきたかどうか。問題とすべき点も多いと考える。

とりわけ、学校五日制の実施という状況において、子どもが“自ら育つ場”として地域を再創造するために、学校と地域の新たな連携のあり方が改めて問われなければならない。

また、学校においても、新学習指導要領に示された「開かれた学校」の趣旨をふまえ、地域の人達の協力を得るシステムや地域のさまざまな施設を利用した学習の推進、あるいは地域の特性に根ざした教育課程など、新たな工夫が必要となろう。特に、新設された生活科は、その教科の趣旨からも、地域や家庭の協力は不可欠の要素である。

#### 4. 地域づくりのために

ところで、このように学校との連携のパートナーとなるべき地域は、実際には、その輪郭が不明瞭になりつつあることを否定できない。多くの地域の実体は、多種多様な人が移り住む場として、人と人が相互に関わり合うことなく（避けて）日常生活が営まれる世界に変化しつつある。

そのため、地域は現にあるものではなく、学校との連携をはじめとするさまざまな活動や学習の過程において培われる人と人の結びつきとして、“人と人（あいだ）”に創られるものとする。

すなわち、“地域”という世界における教育と学習のあり方を、人と人の関係のあり方にまで遡って再構築することへの契機となる学習、いかえれば、“人と人の間（あいだ）”の創造へと広がる“地域づくり”のための“学習の機会と環境づくり”、これが“生涯教育”から“生涯学習”へと変化した三つ目の理由である。

生まれ育つ世界を共有する同質的な人と人の結びつきを前提とする地域ではなく、様々な地で生まれ育った多様な人達が、多様なままに相互に知り合い、認め合い、学び合う関係が積み重ねられる過程において創造される人と人の結びつき。一色ではなくさまざまな色で彩られる地域。これが、今、必要とされる地域であり、生涯にわたる学習を支え、またその学習の過程で創造され続ける地域である。

生涯学習は、上述したように、あくまで個人の意欲を基盤とする学習である。しかし、それは地域の人達の学習要求に応えることのみで専念するという意味ではない。

あくまで、個々の住民のニーズを基盤にしつつも、子ども達が豊かに育つ場として、また、価値観や生活様式を異にする人達が互いに学び合い教え合う場として、さらに、様々なハンディをもつ人と共に生きる場として、日常的な生活の場である地域を創造するための施策が、地域における生涯学習独自の課題であることが強調されなければならない。

すなわち、生涯学習体系への移行は、単に、既存の学習機会の再編成ではなく、生きる場としての地域の再構成あるいは創造へと広がるものでなければならない。

これまでも地域の中には、多様な価値観や世代間の軋轢の中に、あるいは新住民の身勝手さと旧住民の不満の間に、さまざまな問題が生じていた。そしてそれらの問題に人々は悩みながらも対処してきた。そのノウハウは、今後の地域づくりにとって貴重な財産である。

今後の生涯学習の施策は、従来の社会教育やその事業の枠内に止ま

るのであってはならないと考える。学校教育を含めた教育行政全般に対して見識と指導力を持つことが必要である。さらに、生涯学習に関連する他部局の事業や民間での学習機会も含めて可能なかぎりトータルに把握することにより、学習機会や学習者相互の連携を多元的に創造する役割を担うべきである。

その意味で、地域における生涯学習のトータルデザイナー、あるいはコーディネーターが積極的に求められなければならない。

都市化が進み、住民の価値観が多様化し、それに応じて民間の学習機会や各種学習グループが増加すれば、生涯学習に関する行政は不必要になるという説もある。しかし、それは誤りであると考えられる。

人と人が日常生活を共有する場である地域という観点から、多種多様な学習機会を学習者の立場から相互にどのように結びつけデザインしていくか。あるいは、個々のニーズに基づく選択の契機を多様にするために、学習情報をいかに日常的にコーディネートして提供できるか。ここに今後の生涯学習行政が担うべき最も重要な課題があると考えられる。

そして、このような地域を舞台とした学習の機会づくりが、その力を十分に発揮するためには、隣接市町村を始めとして、より広い場での学習機会とのネットワークが必要となる。

## 5. 学習情報ネットワーク

今日、多くの人々にとって、職場や小中学校以外の教育機関は、居住地域とかなり離れたところにあるのが一般的であろう。あるいは、日常的な消費行動や余暇行動も、モータリゼーションの普及に伴い、

居住地域を大きく越えて広がっているといえる。

したがって、日常的な行動範囲という意味での生活空間としての地域は、居住地がある地域と重ならない場合が多々ある。むしろ、それらが重なるのは、幼児から中学校までの子どもと一部の高齢者のみ、といっても過言ではないのではないか。

居住する場を改めて地域として創造することの重要性は上述したとおりである。しかし、“地域づくり”がこのことのみで止まれば、実際に多くの人達が学んでいる場、あるいは今後学ぶ可能性がある多様な機会を無視することになる。

地域創造の視点が、学習者の立場を基盤としてあるとするなら、広域にわたる日常的な生活空間もまた学習者の視点から再構成する必要があることになる。

隣接市町村との学習機会や施設の相互利用や学習情報の共有、あるいは中心都市との関係も含め県域レベルでの情報ネットワークの構築、さらには日本全体から世界に及ぶ情報網をキーボードでコントロールするセンス、これらが今後の生涯学習推進の担い手には求められる。

そしてこれが、“生涯教育”から“生涯学習”へと転換した四つ目の理由とそれに基づく施策の方向である。

市町村の行政区画を基準とした教育行政の範囲で対処する限り、今後益々多様化と高度化が進むと思われる個々人の学習ニーズに、十分に応えることは不可能といえよう。

自らが教える主体になるのではなく、地域の人達の学ぶ意欲を満たす機会をどのように見出すか。ときによっては、それぞれの地域で行政が主体となって学習機会を創造しなければならない場合もあろう。しかし、その多くは、公的民間を問わず、日常的に利用可能な範囲を可能な限り広げた中で、さまざまな形で行われている学習の機会を見出すしかないであろう。

したがって、どれだけ多くの学習情報を収集し提供することができ

るか。すなわち、社会教育においても“教える主体”としての教育事業から、“学ぶ主体である学習者”への学習情報の橋渡し役へ転換することを、これが、新たなしかし最も重要な地域における生涯学習推進の中心的課題である。

## 附表 浜岡町教育課題調査の概要

「教育課題調査」として浜岡町において実施した調査は以下の通りである。

### 1. 成人調査

無作為抽出した20～75歳の町民と、有職者を対象に学習意識・行動を調査。昭和62年11月実施。調査対象数、一般成人1,000人（有効回答840人、84.0%、有職者263人、92.4%）

### 2. 幼稚園調査

浜岡町内全幼稚園・保育所の年長組全学園児の保護者を対象に実施。昭和61年11月実施。調査対象数307人（288人、93.8%）

### 3. 小・中学校調査

浜岡町の小学校4・5・6年の児童と中学校1・2・3年の生徒全員の学習実態と意識・行動について、その保護者も対象に含めて2次にわたり実施。第1次、昭和61年7月実施、調査対象数1,908人（1,873人、98.2%）。第2次、昭和61年11月実施、調査対象数1,915人（1,903人、99.3%）

### 4. 高校生調査

有為抽出した浜岡町に住む高校生の学習実態と意識・行動について実施。昭和61年11月実施。調査対象1,107人（1,068人、96.5%）

### 5. 住まい方調査

有為抽出した家庭を訪問し、家屋の間取り等を実測、家族と面接して調査。昭和61年8月～11月にかけて4回に分けて実施。調査対象数23世帯。

### 6. 生活時間調査

住まい方調査の対象となった家庭の小・中・高等学校に在学する子どもの1週間の生活時間を記録調査。昭和61年11月実施。調査対象数40人。

なお、これらの調査結果は「浜岡町教育課題調査報告書」（本文篇、資料篇）として浜岡町教育委員会に報告された。また、その要約は「浜岡町の教育課題——みんなで見よう！考えよう！——」（静岡生涯教育研究会編、浜岡町教育委員会発行、昭和63年11月）として刊行された。

また、この調査を基にこれまでに次の論文を発表した。

角替弘志、馬居政幸、渡辺晴彦「成人の学習行動の分析に関する基礎的研究（Ⅲ）浜岡町における成人の学習意識・行動調査を中心として——」静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）第39号、平成元年3月

角替弘志、馬居政幸「学習行動による住民類型とその意識特性にみる地域生涯教育計画の課題——静岡県小笠郡浜岡町での学習意識・行動調査をもとに——」日本生涯教育学会年報第10号「生涯学習社会の総合診断」、平成元年11月

馬居政幸「生涯教育（学習）計画の今日的課題についての覚書」静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）第40号、平成2年3月

## 「学びへの挑戦」

—静岡新聞掲載—

1993年3月～12月

### おわりに

私たち静岡生涯教育研究会が浜岡町での調査にとりかかってから既に8年が経過した。その間に、静岡県各市町村においては、生涯学習推進大綱の策定を終え、現在は、まさに地域を基盤にした生涯学習が日々実践される段階にある。本研究会のメンバーも、それぞれが、浜岡町での研究を基盤に、さまざまな地域で生涯学習推進施策の具体化にかかわってきた。そして、その実践化の過程で学んだことが、ここに提起した四つの課題である。

あらためて、私たちに研究の機会を与えていただいた浜岡町教育委員会に心から感謝の意を表するとともに、本書が生涯学習推進の任に当たられている多くの方に、少しでも役立つことを願って、小著の末尾の言葉としたい。

# 学童への挑戦

(7)

先日、友人のコピーライターと  
県青年団連絡協議会の人たちから  
県の「青年の船」について話を聞  
く機会があった。その際、こぼ  
風に「青年の船」を表現したらど  
うなるかと友人と尋ねたところ、  
しばし沈黙の後に書いた言葉が  
「柔軟感性劇場」。それをみてキ  
ョトンとしている私たちをみて書  
き添えた文字がFlexible  
Mind Theat



中国・山東省の工場付属幼稚園で  
交流する青年の船一行

## 大人への旅立ち

### 青年の船のシナリオ



馬居 政幸

静岡県に住んでいると  
いう。感。だけで集まっ  
た約四百人の若者が、暮  
れから正月にかけての十  
二日間を、一六、四三二  
トの客船で運命をともに  
する中国への旅。ひと度  
清水港を出航すれば、い  
かに船酔いに苦しもう  
と、意をくわれない人と  
同室になっても、理不尽  
とも思える規律に不満を  
抱いても、大海原の中で  
逃げるのでない船中  
生活。

▽新たな自分を発見  
▽新しい船のローリン  
グのリズムが体になじむころに  
は、同室者への嫌悪感はいつしか  
自分とは異なる生き方への新鮮な

感動に愛  
わって  
る。強制  
される規  
律も一つ  
の社会で  
人生を下  
ラマにた  
たえて語  
る場  
合がある  
。いかな  
るドラマ  
もシナ  
リオはあ  
る。船も  
また同様  
に研修  
という台  
本に基づ  
く舞台で  
ある。し  
かし、役  
者はシナ  
リオに頼  
る限

考え方から自由になり、柔軟に感  
性をかき自己を表現している新た  
な自分を発見する過程でもある。  
▽自己を演ずる最初の劇場  
人生を下ラマにたたえて語る場  
合がある。いかなるドラマもシナ  
リオはある。船もまた同様に研修  
という台本に基づく舞台である。  
しかし、役者はシナリオに頼る限

り一人前ではない。共演者や観客  
の感性にフレキシブルに感応し演  
技を磨きよくなった時、一人の  
役者が誕生する。その意味で、「青  
年の船」は、大人から与えられた  
シナリオを子供として演じること  
にためらうを感じつつある若者  
が、一人の大人としてシナリオを  
越えて、また自らシナリオ作家や  
演出家となって、さまざまな自己  
を演ずる最初の劇場ともいえよ  
う。

▽学校は柔軟な子を育てる  
小・中・高そして大学も、学

校はあくまで大人が用意したシナ  
リオを子供が忠実に演じることを  
前提とする教育の専門機関であ  
る。だが、加速度的に変化する現  
代では、子供が大人として参加す  
る未来の社会が要求するシナリオ  
のとは全く異なるものである。  
今、学校ができることは、シナリ  
オの自身ではなく、シナリオ、共  
演者、観客、舞台がどのように変  
化しようとも柔軟に読まこなし、  
書き換え、演じていくための一種  
のデータベースを準備することだ  
はないか。

しかし、データは具体的な状況  
に応じて呼び出され、使われ、修  
正・追加されることにより価値が  
生じる。そのために必要な力は、  
現実社会と同様に、まさにフレキ  
シブルに変化する世界の中でし  
か、それも単なるテクニクを越え  
た一人ひとりのマインド(感性  
・意思)を、同じ立場の者と互い  
に鍛え磨き合うことによつてしか  
つけられないであろう。

二十二年にわたる「青年の船」の  
歴史は、若者が一人の大人として  
自立するために、私たちの社会が  
用意しなければならぬ課題や舞  
台の在り方を教えているのではな  
いか。

……………  
☆つまい、まきゆき氏 静岡大  
学教育学部助教、東京教育大学  
大学院卒。「生涯教育とは何か」  
課題から実践へ(ぎょうせい)共  
著」などの著書がある。

# 学童への挑戦

(6)

▽夢のマイホームセンター  
SBSマイホームセンターが県  
下に七カ所設けられている。静岡  
展示場には四十棟近い最新の住宅  
が立ち並び、庭回や小公園も整  
えられているので、高級住宅地の  
雰囲気を感じずすきな一画をなし  
ている。ここには夢が広がる。そ  
のせいか、家づくりには早すぎると  
いふ恋人同士の前で場所にもな  
っているようだ。

昭和四十六年の開設以来、毎年  
二万人前後の人がこを訪れ、今  
日までに延べ来訪者は四十六万人  
になる。(以上、SBSマイホー  
ムセンター広報室調べ)

ついでにミサワホームの相談室  
におじゃまして来訪者の相談の様  
子をうかがってみた。自分たちの  
将来の住まいについて、一体どの  
程度しっかりした考えをもって相  
談に来るのかが気になっていたか  
らである。返ってきた答えは案の  
定、おわたが多数の広さごと横然  
とした聞取りに多少の注意が向い  
ている程度で、生活設計に基づい  
た住まいに対する考えをしっかりと  
もって訪れる人は「皆無」とは言わ  
ないが、ほとんどない」といっ  
たのであった。

▽住居観は住まい手が  
もつとも、あまりしっかりした

## 住教育に息吹を

### 軽視される住まい学

外山 知徳



SBSマイホームセンター静岡  
展示場 実際に人が住める「住生活」  
展示場ができたのだ

ならないのでは商売になりませんとい  
うことであった。しかし住宅建設  
む余地が  
を差し扱  
門家が口  
られて、専  
人との関係の良不良は、住む  
人の不幸につながるからだから  
である。自分の幸不幸を住宅会社  
にゆだねる積りの人はいないで  
あろう。でも、多くの人が知らず  
知らずのうちに、それをしようと  
している。

建築家はひとつの住宅  
を設計するためには何百  
枚ものスケッチを重ね  
る。それは自分の設計理  
念を具体化するための作  
業というばかりではな  
い。依頼主のそこはかと  
ない住居観を徐々に引き  
出し、具体化させるため  
の作業でもあるのだ。

▽ほとんどない機会  
それにして、そもそ  
も住居観を育てたり、そ  
のため住まいに対する  
考え方を教わる機会がほ  
んどない。学校教育で  
は小学校五年から教えら  
れる家庭科の中に住居観  
が置かれているが、家庭  
と被服中心の現在の食生活  
をどういふ住居観はほとん  
どなされていないに等しい。

これから家を建てようとする人

を対象にしたさまざまな企画も、  
そこで取り上げられるのは住宅の  
ハード面の知識(新商品・新建材  
の情報)、資金繰りや税金対策が  
ほとんどで、住まい方や住まいに  
対する考え方を教えてくれるもの  
はほとんどない。結局、いざ建  
て段になって、また家を建てたこ  
とによつてようやく住まいのこと  
を真剣に考えるようになるのが普  
通である。でも本当はそれでは遅  
すぎる。

そんなだから住んでからの子育  
ても、住生活を通したしつけもな  
おざりになってしまう。そこまで  
考えた住まいづくりのできる人は  
少ない。

▽自ら学ぶものか  
一年前、中遠農林事務所小笠支  
所の生活改良普及員が中心になっ  
て、小笠地区の農家の人たち二百  
余人りが住宅事情調査や住まいの  
改善事例の収集を行い、「農を営  
む家・くらしを創る家」と題した  
冊子にまとめたことがある。自分  
たちの住まいを見直し、そこにこ  
れからの農家の住まいの在り方を  
考える手掛かりを見いだそうとし  
たのである。住居観は教わるもの  
でなく、自ら学ぶものかもしれない。  
い。

マイホームセンターも、いっそ  
この人を実際に住まわせて、ひ  
とつ々の生きた助ける人れば、住  
む人にとってものりになるにつれ  
ても生きた住居教育の場になるであ  
らうと、ふと思った。

(静岡大学教授「住居学」)



# 学びの挑戦

(19)

先日、小学生になった長女が、「今日ね、Aちゃん友達になったのよ。Aちゃん、車いすのつてんだよ。」と、小学校であった養護学校の子供たちとの交流の話を目を輝かせて語ってくれた。私はなんのこたわりもなく話す長女に笑顔で答えながら、今年五年生になる長男との苦い経験を思い出した。

## ▽車いすの人を冷やかす

私が住む地域には総合病院や養護学校があることから、車いすで行き来する人たちが路上で出会う機会が多い。まだ小学校に入學する前の長男と二人で散歩している時であった。車いすで来る人を見た長男が突然その人を冷やかす言葉をつぶやいた。思わずしかりつけたものの、それ以外に六歳の子供に語る言葉をもたない自分を残念に思った。

先週のこの欄で、私は異なる文化に住む人とのコミュニケーションを阻む私たちの壁について述べた。だが、この壁は外国人との間のみでなく、日常生活のさまざまな場面で見いだせるのではないか。

例えば、地域に古くから住む人と新しく住むようになった人の間の壁。あるいは、学歴が異なる人

の間、職業が違ったり、高校生のF君がそうであったように大人と子、成長する契機であった。女の間には、ヒトは人間として生まれるのである。人間として育つといわれ、そのことを象徴するのが人間

## 壁の体験し成長

違和感が人を育てる

馬居 政幸



ポランティア体験は豊かな人間形成の契機になる

人の間にも壁はある。息子の言葉への私の戸惑いは、六歳の子供に伝える術をもたない私自身の壁に気付いたからである。

静岡県ポランティア協会が毎年

(静岡大学助教 馬居 政幸)

夏休みには主催する「サマーショールト・ポランティア活動計画」に参加した高校生(女性)の体験レポートに「正直に言えば、初めてこへ来て患者さんを見た時は、思わず目を閉じそうになるほど怖く感じ、言葉も出ませんでした」とい言葉を見られた。

という漢字。人と人との間にあつて初めてヒトは人間となる。さまざまな人との出会いこそ、ヒトを人間として成長させる場である。とすれば、異質な人、あるいは違和感を感じる人との交わりにこそ、最も豊かな人間形成の契機があるのではないか。

このように考える時、異質な他者と自己の間にある壁を自覚した時こそが、さまざまな人との間に生きていくことのできるトータルな人間としての力を育てるチャンスではないか。壁があること自体が問題ではない。壁の存在を知ら

ないままに育つことこそ問題といえる。

無意識の言葉で長男が冷やかした車いすの方。その息子が小学校に入學した後に養護学校との交流で得た友達のS君。同じく、長女の友達Aちゃん。そして、何よりもこのような自分を発見する契機をつくらせてくれた二人の子供。サマー・ショールトに参加した人たちと同様に、私もまた、父親として、さらに一人の人間として感謝申し上げたい。

▽話しかけられない：「自分と同年代の人たちはいったいどのような生活をしているのだろうか?」この問題を胸に、僕はタイに到着した。最初に出会った若者は、二人の十五、六歳の少女たちであった。空港の雑役係をしているらしく、モップを持っていた。何か話してみようと思ったが、壁のようなものを感じ、その壁を乗り越えていくことはできなかった。

これは、興ボランティア協会主催の「海外でのポランティア活動に学ぶスタディ・ツアー」に参加した高校生のS君がその報告書に寄せた一文である。

経済力の高まりとともに増加する海外で活躍する人たちやその子供たち、逆にさまざまな理由で来日する多くの外国人たち、日本の国際的地位の変化に伴い、異なる文化に住む人たちの相互理解のためのコミュニケーションの方法を学ぶ機会が拡大が要請されている。教育をめぐる今日的課題の一つに国際理解教育が掲げられる理由である。

しかし、それは、同質性と集団への帰属を重視する日本の社会と文化にとつて、かなり困難な課

# 学びの挑戦

(18)

用したS君の「壁」という表現ではないか。

## 国際交流の壁

自分の心の中にある

馬居 政幸



壁を打破ってくれたのは子供たちとの交流だった

スタディ・ツアーは、タイに住むカンボジア難民へのポランティア活動を体験することにより、そこで得たもの、学んだもの、出会い、彼らとの片言の英語とポディーランゲージによる歌や踊りや遊

びであった。

このように彼の体験は次のようなことを私たちに教えてくれる。まず、彼が少女のまなざしから感じた壁とは、少女の目に写った彼自身の姿であったこと。それは自分とは異なる者を前にした時の私たちが自身の最も大きな要因の理解を阻む最も大きな要因は、異文化自体ではなく、自己の文化を基準に理解しようとする私たちが自身とその文化にあるといえまいか。

# 学びの挑戦

(33)

大正時代の女性の平均寿命は四十歳代。昭和に入っても戦争が終るまで五十歳を超えられなかった。多くの女性は四十前後まで子供を産み続け、未っ子が二十歳をすぎるとには自分の一生が終わった。おまけにはこの時代の結婚とは夫の家に嫁ぐこと。長男の嫁にでもなろうなら、夫の父母とごろか祖父父母と小姑(じゅご)の世話に明け暮れる女性も多かった。

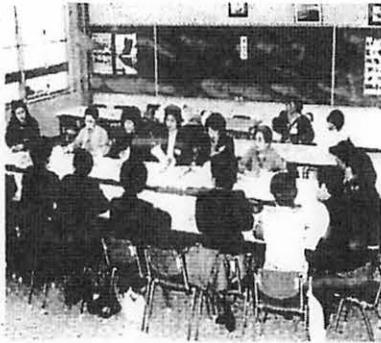
▽「女に学問はいらない」過去  
このような女性に必要なのは家事と育児の技術に似た家の理不尽な要求にも従順に従う忍耐。いずれも学校教育外のことで、「女に学問はいらない」と言われた時代である。

前回紹介した婦人問題通信講座受講者のレポートの一つに、女子校に進学したから明治生まれのお母さんが祖母から言われたとして、次の言葉が記されていた。「小遣いをやるから、女学校はやめる」「かんざしをやるから勉強をやめる」

女性の生き方が定められていた時代は学ぶことを許されなかった時代でもあった。その意味で、女性の進学は新たな女性の生き方を

## 新たな生き方創造 ヒントは日常の中に

馬居政幸



相互に学び合っており、女性の生き方を考える学習が発展する

選ぶ取る 間は約四十年。といことは、現在四十歳の女性は自分の母親とは全く異なる生き方を要することに。前回のコラムで「家族の在り方に関する限り教科書的模範回答は全くすべからず、応用問題である」と書いた。しかし、このことは人生八十年とはお手本のない人生ともいえる。

それでも、男性は仕事という社会の仕組みと運動して変化する世界に身をゆだねることにし、生き方をあおるという学べることが可能。だが、一人家庭で家事と育児を担う女性にとりて変化への対応はあくまで個人的な課題。今日、生涯学習の社会的背景に女性のライフサイクルの激変変化があげられる理由である。それに対応して家庭教育学校からカルチャーセンターまで女性が学べ機会は多い。女性問題通信講座もまたその一つである。

「かんざし」や「小遣い」を覚え

半ばは四十年代に母親以外の新たな生き方を学ぶことが可能になった。ところが、人生五十年から八十年の時代を迎えるのに要した時

てても学ぶことを許さなかった祖父の時代。逆に、補助金を出してまで学ぶことを奨励する現代。女性の学びにまつわる社会的条件は全く異なる。だが、女性にとって学ぶことが自分の生き方を選択創造することと結びついていることは共通しているといえよう。だが、かつての学びは伝統的な女性の生き方を否定するところにあった。その意味で一種の模範回答が用意された学びであった。だが、今必要な学びは自分の生き方という答えを一人ひとり独自に創造するための学びである。

▽学び合うネットワークへ  
学校はあくまで多くの人に共通する知識を教える場。問われているのは個々の女性の生き方。問題は普遍的な子供や女性に関する情報の取得ではなく、個別的な日常を創造するための知識や技術をいかに学び取るかである。とすれば、答えはヒントは日常の経験の中にこそ蓄積されているのではない。学校での学びを契機として自分や身近な女性の経験を見つめることから多くの人の間で交換される時、初めて学びは新たな生き方の創造に結びつくのである。

通信講座の受講者が相互的な知識の獲得に終わらずに相互に学び合うネットワークづくりへと進んでいくことを願いたい。

(静岡大学助教授「社会科教育学・生涯教育論」)

# 学びの挑戦

(32)

「『後は赤ん坊が教えてくれるよ』というセリフを残して母は帰っていった。床を叩き、まだ自信のない私にとってその言葉は大きな力であった」

▽育児書にない言葉

これは、異端人観主権の婦人問題通信講座において、講師の一人である私あてに出された受講者Sさんのレポートの一端。明治生まれのお母さんが、Sさんの長男出生の際に教えてくれた言葉である。そしてそれは、どの育児書にも書かれていないが、私自身が四人の子供の親として実感していたことを端的に表現してくれる言葉でもあった。

講座で私が担当したのは「現代家族と婦人」の章。提示したレポートの課題は「あなたご自分の家族とのかかわりにおいて考えてほしいことである。そのためには、まず自分ご家族の問題とは何かを見定めることである。」

提起したわけである。ところが、受講者から送られて

## 身近にある知恵

学びとる目を育てる

馬居政幸



四百五十人余が参加している現代の婦人問題通信講座の開講式に出席する主婦たち

その契機 掲げたSさんの一端である。として、いや応なく姑(じゅご)に最も身近 仕え夫をたてる嫁の役割を強いな母親の れてきた明治生まれの母親。戦争生き方と 乱と高度成長の流波の中を女の細腕で生活を支えながら子供をしつてきた大正生まれの母親。女性

としていかに生きるかを曲がりなりにも選択できた時代ゆえに、かえって妻、母、女としての在り方に悩む戦後生まれの母親。これまで気付かなかったさまざまな世界を私に教えてくれた。しかも、その多くは、Sさんのレポートに見られるように、単に母親との対比に終わらず、現在の自分と家族の課題を問ひ、さらには、その在るべき方向を見いだす過程として記述されていた。

▽情報は豊富だが：  
シグナルやディンクスのが風俗としてマスコミの話題になり、夫婦の呼び

性と女性がどのように生きるべきかを一律に提示するところが困難な時代といえよう。他方、育児書を代表に、女性と家族に関する情報がこれほど豊富な時代もまたかつてなかったであろう。それぞれの家族はその課題に応じて情報を取捨選択し問題解決に臨むしかないのでないか。言い換えれば、家族の在り方に関する限り教科書的模範回答はなく、すべて応用問題であると考える。

一方、家族の問題が「おんな(おんな)の世界として、女性、それも母親といつ女性の在り方にゆだねられてきた」とも否定できない。その意味で、今日においても、ほとんどの家庭で、家族に関する応用問題を解く役割を主婦という女性が担うべきをえないことも事実であろう。

▽家族を支える女性  
男性が逃げていく間も子供を育て家族を支えていかざるをえない女性。しかし、それゆえに女性は、問題を解くべきを、いつのまにか日常生活の中に蓄積し続けているのではないだろうか。そのことを通信講座受講者レポートは講師である私に教えてくれた。

今、必要なのは、そのような身近にある知識と知恵に気付く学びとる目をいかに育てるかである(静岡大学助教授・社会科教育学・生涯教育論)

# 学びの挑戦

(35)

先月のことなるが、ミュンヘンで出された新市庁舎の絵はがきが突然届いた。「一事研修で学んだ新市庁舎の人形たちのパレードとゴシック様式の素晴らしい目を写真見ました」と書いてある。静岡県婦人の海外研修団一同からの便りであった。

## ▽婦人指導者を養成する目的

県は昭和五十三年から、県内に在住し、各種婦人団体・グループ等に属して地域活動を行っている三十一歳以上の婦人を対象にして、市民レベルでの国際的視野にたった婦人指導者の養成を目的に、二週間余りの日程で毎回二十人、これを三回、アメリカに派遣している。今年も七回目にあたり、これまでの延べ派遣者は百五十余名を数える。

出発に先立ち、さまざまな事前研修を行い、その中の「ドイツの生活と文化」の講義が私が担当した関係で、冒頭の絵はがきを頂いたのである。行く先で関係機関・施設での研修、合計四泊のホームステイとスケジュールはなかなかハードである。おそろしく皆さん頭の中を引っかき回されたような状態で帰ってきたのではないかと思う。実際、異文化に身を置く体

有効な学習の機会である。  
▽常識が常識でない社会  
海外での体験ほど強烈ではない

## 異文化に身を置く

「自分」が見えてくる

外山知徳



カナダで活動する婦人たちの海外研修団

ので気がつかないことが多いが、もっと身近な社会にも異文化は日ごとだからと、ヨーロッパでは

験はさまざま  
たまにメ  
ディアが  
発達した  
今日で  
もなお  
あること  
ものらしい。

いると、大学の教官だから通用する考え方について、そのことに気がつかない場合がある。先づ世間を騒がせた大使館員の財テク事件にも、そういった限られた社会にしか通用しない常識が働いていたに違いない。私自身、静岡市で長年育ち、八年ほど前に二十年ぶりに静岡に帰ってきた当初、静岡の人ってこんなだったのかと大変驚いた経験がある。

だからこそ異文化に学ぶ意義もあるのだが、異文化から学ぶこと、異文化を異文化として認識すること自体、案外難しいことである。よく、アメリカでは

こんなふうになっているからなど、なぜそれがアメリカやヨーロッパでは可能なかの検討もつくにせず、日本に持ち込もうとする識者がいる。

昔、ドイツは室内から操作できる巻き上げフラインドを紹介し、そういう便利なものを輸入しない日本の住宅関係技術者の怠慢を指摘した文化人がいた。しかしこれは壁厚が四十センチもあるドイツの建築構造と、たかだか十センチの日本の建築構造の違いを無視した滑稽な意見でしかない。その文化人は戸袋を必要とするという理由で日本の雨戸をくららないものと同じなしたが、大体において戸袋があるところは筋違(すじり)があり、窓をつげられない壁を利用した、木造軸組構造の合理性を知らない考えである。

▽なぜ、異、か考える

そういう癖(てづ)を踏まぬためには、異文化に接したとき、なぜそれができるのか、なぜそのように考えるのか、自分自答することである。答えが自分自答の文化に対する理解である。するとこんなことは自分が見えてくる。自分(たち)はなぜそうしてこなかつたのか、そしてようやく自分か属する社会が客観的に捕らえられ、異文化から学んだことを生かすのは、そこに見いだされる文化のキヤップを乗り越えてはじめて可能になるのである。

(静岡大学教授 住居室)

# 学びの挑戦

(34)

先日、神奈川県内にあるユニークな公共施設を見学する機会があった。横浜こども科学館、川崎市青少年の家、ヤングコミュニケーションセンター(厚木市)の施設である。その名称が示すように、いずれも青少年教育を目的として建てられた市の施設。ただ、当然のことながら青少年教育を目的にするといつても、その中身は大いに異なる。

## ▽説明のない展示物

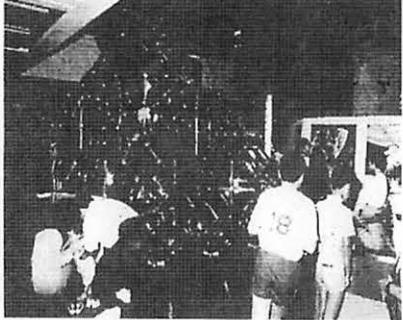
横浜こども科学館は小中学生を最新の科学の世界に誘う施設。それも、難解な科学的知識を理解させるというより、科学することの楽しさと不思議さを子供たちが五感で感じられることに工夫を凝らした施設。

例えば、二二の展示物には説明文がない。言葉で理解する前にまず科学の世界に触れることこそ重要。疑問は職員との対話や館内の図書館で自分の力により獲得してほしい。そのかわり、電子顕微鏡からパソコンまで、この館の中にあるものは、どんな高価なものでも自分で直接操作できないものはない。そのために、展示物には子供たちの工夫が施されている。その代表がスペースシャワー(フラネタ

ムフットはすべて職員の手作り。  
川崎市青少年の家は全国の青少年

## 若者とりえる施設

馬居政幸



横浜こども科学館の展示物には説明文がない

年の家と同様団体宿泊施設。ただし、通常、青少年の家は自然の中での子供たちの活動が売り物だ

が、大都市川崎をそれを望むのは無理な相談。逆に、この青少年の家から宇宙のユニークさは、都市に住む子供たちの考え方や感受性を可能な限り映し出し、それを豊かにはぐくむための工夫がなされている点である。▽豪華さと使いやすさ  
その第一が施設の豪華さ。まず、ヨーロッパ中世の城を思わせるような外観。エンターテインメントは吹き抜けて天井は三角すいのガラスの組み合わせ。オリエンテーションホールは正面全面ガラス張り、映写ビデオ、照明施設付設のミニシアター。衛星放送はいつでも受信可能。宿泊ルームも四人一部屋でシティーホテル仕様。第二に使いやすさ。例えば、研修ルームすべてに衣服掛けと荷物置きがセットになった家具と鏡。付いた手洗い場が備え付けられている。そして、規則は基本原則にとどめ、生活時間や食事時間を除

一般には、質実剛健と厳しい規律が長くも悪くも青少年の家のイメージだが、ここは全く逆。豪華な施設を自由に使用せよ。やり、かえって、自律性・責任感・実行力といった力が獲得できると考えている方法。

▽利用方法は利用者が決める  
ヤングコミュニケーションセンターは、本厚木駅前にある再開発ビル五階という位置が示すように、厚木市に住む若者が、念だんの生活の中で自由に集い語り遊び学ぶための場として造られたもの。そのため、施設として特に豪華なものはないが、いずれも若者との対話の中から生まれてきたもの。その代表が音楽施設。高度な演奏・録音施設を備えた二つのスタジオ。ここから誕生したプロのロックバンドもいるとのこと。そして、施設利用の方法も可能限り若者自身で決め、センターの職員はアドバイザーに徹している。

科学するに子供たちの心を結合装置。自律と責任の両輪を鍛える青少年宿泊施設。学校帰りに気楽に若者の寄居場。と、ここに上げた三施設はそれぞれ全く異なる。しかし、共通しているのは、大人として認められる前の人々(いわゆる青少年)に対し、公的機関が用意しなければならぬ施設の在り方を提示していることではないか。

(静岡大学助教 社会科教育学 生涯教育組)

# 学びへの挑戦

43—完

三・四歳児の子供を持つ親のた  
めの学級で、ある講師が幼児期  
の学びの大切さを話していたが、  
それに対して若い母親から次のよ  
うな意見が出された。

「今のお話のなかで、子供にも  
我慢させることが大事だと言われ  
ました。私が私はずいぶん思いません。  
これからはますますと豊かな社  
会になるので、子供にも我慢が自  
分のしたいことを、だれにも遠慮  
せずに、思い存分にできるように  
なると思います。個性が大切だと  
言われます。自己主張できるこ  
とが大事だと言われているのであ  
りませんが、我慢させることはあ  
りませんか。我慢させることは  
必要ないと思います。私自身も  
我慢をしないようにしています  
し、それで困るなどということ  
ほどありません。」

他人に迷惑をかけるしなけれ  
ば、何をしてもよいではないか、  
という考え方は、迷惑をかけてい  
ないと言っている人は迷惑を  
かけていることが多いという実態が  
あるにもかかわらず、意外に一般  
化して、自分以外だれもいないと  
ころで暮らしているか、あるいは、  
自分だけが主で、他の人は皆自  
分にかまわなくてよい生活をして

## 「我慢」は不必要か 心の豊かさへ努力を

角替 弘志



異青年の船結団式で宣誓する研修生

いるなら、それなら、それがちではあるが、本当の  
いざ知らず、意味で自分を大切に、他人を  
ず、他の、尊重するためには、又くことので  
人を無視、きかな生活の基本的態度だとい  
し、他の、ことを改めて自覚したい。  
人の立場

を願望して、よい生活は、  
もしそれが可能だとしても、決して、  
て望ましいものでない。わがまま  
生活にしても、たぐさんのもの  
なから好きなものを自由に  
と、万事がうまくいこう  
わけではないよ。グ  
ルメ時代とはいけれど食  
たいものだけを食べている  
と、よほど注意しないと、栄  
養が偏り、貧しいや応なく  
食をさせられるの以外口に  
できなかった場合より、健康  
上は問題がでてきてしまっ  
ものが豊富にあればあるほ  
ど、しっかりと勉強し、選  
択しなければならぬ。選  
択を誤ると、選択の余地など  
余儀なく、そのしるを得  
なかつた場合より、悪い結果  
になるというところはよくある  
例である。

らし、物もそんなに豊富にはない  
生活のなかでは、特に教えられな  
くても自然に身につく態度であつ  
た(した)こともできないとい  
ことから必要悪でもとらえられた  
が、我慢だけでは、貧しい  
生活のなかで、子供も家の仕事を  
無理やりさせられるなかで意識も  
自覚もしないうちに身につける  
いろいろな意味で重要な能力や態  
度も少なくない(も)とも、望  
ましくない態度等が身につけしま  
うということもあつたが、しか  
し、こうした能力や態度を、あ  
えて苦勞をすることもない豊かな生  
活のなかで自然に身につけること  
は容易ではない。

目覚ましい科学技術の発達や急  
激な社会構造の変化のなかで、生  
涯にわたって新しい知識や技術  
の考え方を絶えず学び続けて  
いくことが求められる。しかし、  
それだけでなく、生活が豊かにな  
り、社会的な拘束が取り除かれ許  
容の範囲が広がり、自由と自分の  
意思で選択できるよになること  
他から強いられることがない代  
わり、情性でも生きられる世の中  
になる。  
物質的に豊かになり、自由に生  
活できればできるほど、困難さ  
自ら挑戦し心の豊かさを生み出す  
努力をあえて続けなければなら  
ない。豊かであるからこそ、手  
への挑戦が求められる。  
(静岡大学教員 社会教育)

# 学びへの挑戦

(42)

## 消防団と生涯教育 地域を支える人を育成

馬居政幸



成人式の参加者に明るい選挙推進  
を訴える人たち

最近、連続して地域を舞台に生  
涯学習を進める際に必要な視点を  
学ぶ機会があった。それも、生涯  
学習が提唱される以前から地域で  
その役割を果たしてきた組織に気  
付かされることを通じてである。  
その一つは「明るい選挙推進協  
会」が主催する「若者と女性に好  
まれる選挙って？」というテーマ  
でのパネルディスカッションにパ  
ネリストとして参加したこと。  
もう一つは静岡市内中心部にある  
小学校の公開授業で消防団の仕事  
に関する四年生の社会科の授業を  
見せて頂いたことがきっかけで学  
んだ「消防団」のこと。

最近、連続して地域を舞台に生  
涯学習を進める際に必要な視点を  
学ぶ機会があった。それも、生涯  
学習が提唱される以前から地域で  
その役割を果たしてきた組織に気  
付かされることを通じてである。  
その一つは「明るい選挙推進協  
会」が主催する「若者と女性に好  
まれる選挙って？」というテーマ  
でのパネルディスカッションにパ  
ネリストとして参加したこと。  
もう一つは静岡市内中心部にある  
小学校の公開授業で消防団の仕事  
に関する四年生の社会科の授業を  
見せて頂いたことがきっかけで学  
んだ「消防団」のこと。

「明るい選挙推進協議会」は、  
その名が示すように、「啓発事業  
を通じて国民の政治意識の向上と  
明るい選挙の推進を図り、もって  
民主政治の発展に寄与すること」  
を目的とする全国組織。静岡県で  
も昭和五十六年に各市町村で設立  
された。もともとこのようにいか  
めしい目的や名前を知らなくても  
成人式の会場や選挙公示後の駅頭  
などで、正しい選挙を訴えるちらし  
とを配布する人たちに会う経験  
を持った方は多いであろう。ま  
さに地域において政治に関する住

て小学校六年の社会科の授業を奉  
し、  
た。ところが意外にも、地域で  
の活動の中心者であるはずの参加

私は不明を恥じ、自分なりに関

係機関を訪ね、消防団のことにつ  
いて調べてみた。その結果、いく  
ら公的な消防施設が整っても消防  
団が果たす役割はなくなる(こ  
か、むしろ増える)ことが分かつ  
てきた。例えば、ビルに囲まれた狭  
い路地の迅速・確実な消火は、  
だん、そこで生活している人の協  
力があって初めて可能。さらにそ  
のためには突発的に生じる火事に  
臨機応変に対処するための日常的  
な学習・訓練とそれを担う組織が  
必要となる。ここに、都市社会  
に住む多種多様な人々を対象と  
する生涯学習機関としての消防団  
の新たな課題がある。すなわち、  
伝統的に消火作業の訓練を通じそ  
の地域を支えていく人々を育て  
てきたのが消防団。そこで培った  
人間形成のノウハウを、たとえわ  
ずかの期間でもその地域に住む人  
々に、ともに生活していくためのル  
ールを教えるために(蘇生)をせ  
せてほしい。

「明るい選挙推進協議会」と消防  
団。その目的は異なるが、ともに  
「地域の人づくり」を担ってき  
た組織。そして、その役割と新た  
な課題を子供の学習を通じ私に気  
付かせてくれたのが学校での教  
育。今、地域での生涯学習は、こ  
のように、地域にあるさまざまな  
組織の蘇生と相互のネットワーク  
ングにより、確実な歩みを始め  
ているのである。

(静岡大学助教授)

社会科教育 生涯教育

地域における生涯学習の課題

—— 浜岡町教育課題調査より ——

平成5年3月31日

印刷・発行

頒価 2,500円

編著者(代表)

角 替 弘 志

馬 居 政 幸

〒422 静岡市大谷836 静岡大学教育学部内  
☎(054)237-1111代

編集協力

社団法人 静岡県出版文化会

印刷

株式会社 三 創

©1993.3